

第4章

感情表出の制御と 内的適応感および社会的適応感との関連

第4章 感情表出の制御と内的適応感および社会的適応感との関連

人間にとって友人・知人の存在は、本来は人生をいきやすくしてくれるはずである。ところが、世の中には人づき合いは時間の無駄だとか、人づき合いは表面的なことが多くかえって疲れるとか、人づき合いがなくても自力で生きられると思う人がいる。こういう人は結局孤立しやすくなり、欲求不満が慢性化する可能性が高いであろう（國分，1995）。人間関係を良好に保つことは重要であるのに、どうしてつき合いを避けたいくなるのだろうか。それは他人といると「気を使いすぎて疲れてしまう」という部分が多いように思われる。すなわち、相手の気分や考え方や置かれている状況などを察して、自分がどう行動したほうがいいのかに常に神経を使わなければならないことに疲れを感じるのである。言い替えれば、人間関係を避けたいくなる理由の一つとして、人間関係ではありのままの自分を出しにくいということが考えられる。

われわれは日常生活の中で、本当の感情をそのまま表すより、相手に受け入れられると思われる形にして表すことや、自分が表しやすい形にして表すことなど、その状況や個人の特性によって感情の表出方式が異なることが多い。このような「感情表出の切り替え」は社会生活の中で必要であることは事実である。すなわち、どんな人でも、心の中にはさまざま異なる気持ち（要素）が存在しており、どんな要素で自分を表現するかはその状況とその個人の特性などの要因によって、その場その場での異なる形で現れるであろう。

また、感情表出の制御の意味合いはその相手によっても違ってくることが考えられる。人とのかかわり合いには様々な形があり、その深さにはいくつかのレベルがある。「表面的つきあい」程度のものもあれば、「心のふれあい」に至るまで深淺のレベルがあり、適切につきあうことが大事であろう。す

すべての人間関係において本音でつきあわなければならないと思ったり、または相手の機嫌をそこねてはならないと気がねばかりしていたりするような偏りのあるつき合いは疲れてしまうはずである。

青年にとって重要な人間関係である友人関係は、親子関係や教師関係のように保護や援助の関係でもなく、会社の上司と部下の関係のように縦の関係も利害関係も存在しない。どちらかが一方的に支えたり、配慮してくれる関係ではなく、交換やルールに基づく対等な関係である。すなわち、青年にとっての友人関係は本来的に十分、自分を出せる関係であり、そうすることによって葛藤や摩擦があってもそれを克服しながら、人間関係におけるスキルを洗練させることができ、自分と他者を信頼することが可能になってくると思われる。

しかし、近年友人関係の希薄化が進み、お互いに本音でぶつかりあうということが少なくなってきた。すなわち、友人関係において感情を多めに制御して表すということである。青少年が友人関係において感情表出の制御を多く行うことは、いい方向への変化であるとは考えにくい。本当の感情を表出できないことは、ストレスとなり、攻撃性が高まったり、偽りのある自分自身に対する信頼や尊厳が低くなったり、「本当の私は？」などの自我同一性感覚を低めるなどの内的適応感と関連することが予測される。また、自分の感情を表出できず作り上げた自分のイメージで友人と付き合っているため、友人関係における満足感が低いのではないかと思われる。また、感情表出の制御は中学・高校生の学校生活での適応感とも相互に影響を及ぼすことが考えられる。

以上の議論に基づいて第4章では、中学・高校生を対象に感情表出の制御と内的適応感（自尊感情、充実感、ストレス、キレ衝動、自我同一性）および社会的適応感（友人関係の満足感、学校生活意識、問題行動念慮）との関

連について検討する。

第1節では、内的適応感の中で自尊感情、充実感、ストレスおよびキレ衝動の4つの変数を取り上げ、感情表出の制御と内的適応感との関連を検討する。なお、精神的健康を測定するための4つの変数のうち、キレ衝動の測定道具が見当たらないため、キレ衝動尺度を新たに作成する。

第2節では、社会的適応感の中でも友人関係における満足感を取り上げ、感情表出の制御と社会的適応感との関連を検討する。

第3節では、社会的適応感の中で学校生活意識と問題行動念慮を取り上げ、感情表出の制御と社会的適応感との関連を検討する。

第4節では、内的適応感の中で自我同一性を取り上げ、感情表出の制御と内的適応感との関連を検討する。

第1節 感情表出の制御と精神的健康との関連 [研究4]

本節では、中学・高校生の感情表出の制御と精神的健康との関連を検討することによって、青年の友人関係における感情表出の制御の意味合いを検討しようとする。精神的健康を測定する指標として、自尊感情、充実感、ストレス、キレ衝動の4つの変数を使用するが、それは次のような理由による。

まず、感情表出の制御は、悲哀感、絶望感を伴うような深刻で否定的なものではなく、より軽い状態の自分に対する低い自己評価や自己肯定と関連する可能性がある。King & Emmons (1990) の研究でも、感情表出における葛藤と自尊感情に最も高い相関関係が認められたが、この自尊感情は、自尊、自己受容などを含め、人が自分自身についてどのように感じ、評価しているかに関する感覚であり、自己肯定度や自己評価を測定するのに適していると考えられる。感情表出の制御を多く行うことは自分を偽って表現するという感覚になり、それにより自分の尊厳を傷つけることが予測される。

充実感には「充実感気分—退屈・空虚感」、「自立・自信—甘え・自信のなさ」、「連帯—孤立」、「信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散」の4つの側面から構成されているが、この中でも「毎日の生活の面白さ」や「生活の張り合い」を感じているかどうかを測定する「充実感気分—退屈・空虚感」の側面を使用することにする。生活の面白さや張り合いは精神的健康を保つのに重要な側面である。自分の感情を多いに抑制することは生活が面白いと認識することを妨げられると思われる。

次に精神的健康に関する研究でその指標として最も多く使用されているストレスを用いることにする。いつも仮面をかぶっている状態というのは、友人関係における疲れを感じさせ、インパクトの強いストレッサになるのではないと思われる。

最後に、精神的健康の一つの指標として「キレ衝動」を用いた理由を述べる前に、「キレル」ということや「キレ衝動」とは何かについて整理することにする。「キレル」ことに対する意見や観点はさまざまである。例を挙げると次のようである。「キレルは『堪忍袋の緒が切れる』のように我慢していたことが押さえきれなくなり、怒りが爆発することである」(折出, 1998)。

「人間関係の中で自己表出や自己表現を押さえ込む外的な力が働いていて、さらにそれを内面化し、自己表出や自己表現を抑圧、解離し『おとなしい』仮面をかぶることを習性としてきた子どもたちがキレルであろう。内的葛藤ないしはストレスの『行動化』として『荒れ』と『引きこもり』という運動的な表出が現れる。すなわち、子どもたちの自我と無意識との閾が一気に崩れると、それらの情念が具体的行動として噴き出す。これが『切れる』という行動である」(竹内, 1998)。「外に不平や不満を出さずにじっと耐えている子どもたちは、自尊感情が十分に育たずに心の中に満たされない思いが鬱積していくのかもしれない。『キレル』とは身体と心が『ムカツキ』、爆発するのである」(井本, 1998)。「キレル」ということは「勉強しなさい、人に迷惑をかけてはいけない」と小さい時から口うるさくいわれ続け、行動を規制され、制限され、その反面人間としての教育がなおざりにされてきた子どもたちの反乱かもしれない。

以上の内容を整理すると、キレルということとは「自分にとって不快なことを無理に押さえ込んでいた状況で、何かをきっかけに自分の感情を普段との異なる形で表す行為」である。感情表出の制御を多く行うことは本当の自分を抑えることが多く、感情表出の制御を多く行うことはキレと密接な関連があると考えられる。

ただし、キレルことには、「キレル」行動自体とキレル以前の「キレ衝動」の2つ段階が考えられる。つまり無理に自分を押さえ込んでいる状況で「も

うこれ以上我慢できないかもしれない」とか「状況を考えず思いきり怒りを表現したい」などのキレ衝動を経験する段階があることが予想される。

キレる行動自体は暴力的行動のような形で現われることが多く、実際にキレた経験や行動について尋ね、たとえ高い得点が得られたとしても、それが攻撃性が高く、すぐ怒りを爆発させる性格であるからキレた経験が多いのか、自分を多めに抑え込む人でそれが蓄積されてキレ行動が現われたのかを判断することが難しいことから、「キレる行動」を用いることは適切でないと判断される。その代わりに、感情の表出の制御を多く行う人はすごく自分をコントロールしていて、滅多にキレたりしないが、自分の中で「もう限界だ。キレるかもしれない」という予測を含んで、「キラしたい」という「キレ衝動」が高まっていることが考えられるため、本節では「キレ衝動」を用いることにする。

以上の議論に基づき、本節では、自尊感情、充実感、ストレス、キレ衝動の4つの変数を用いて、感情表出の制御と精神的健康との関連を検討することにする。

1. キレ衝動尺度作成 [研究4-1]

目的

最近、マスメディアや教育専門雑誌などを見ると必ず接する言葉がある。‘教育の危機’，‘校内暴力’，‘荒れる子どもたち’などである。それに対応し、「これまでの教え込み式教育や偏差値教育ではだめだ。生きる力をはぐくみたい」、「子どもの問題行動、学校の単独解決に限界、家庭、地域などと連携を」などなど、さまざまなキャッチフレーズの下で実に多様な論

議や試みが行われているのが今の教育実情である。

そのような問題行動を示す子どもたちを、「ムカついた」、「キレた」という言葉で表現しているが、このよく耳にする「キレる」というのはどういうことであろうか。その言葉的な意味としてはキレるということは「自分にとって不快なことを無理に抑え込んでいた状況で、何かをきっかけに自分の感情を普段との異なる形で表す行為」と言える。長谷川(1998)はキレるということは「他人に気付かれまいと抑えられた感情が存在し、抑えのたかが何かの拍子にはずれてしまうと、ふだんは決して見られないその感情が行動を伴って突然に現われる」ことであると述べている。また、キレるということの説明するために、「堪忍袋の緒が切れる」という言葉がよく引用されるが、その意味について長谷川(1998)は「こらえている感情を、ひたすら表に出さないようにして、袋という心の中の入れ物に入れておき、ある感情が袋に入ってきたかと思ういとまもなく、また新たな感情が送り込まれ、次から次へ押し込まれる一方になり、結局それらを外へ出す機会をのがしてしまう。ふくれあがった感情はやがて袋の容量の限界に達するが、その時に力を発揮して、ギュウギュウ詰め感情を外に飛び出さないように縛っていることがとうとうキレること」であると説明している。すなわち、感情表出の制御を多く行うことはキレ予備群ということであり、限界に達している感情をぶつけたいという「キレ衝動」が高まっているはずである。

キレる子どもたちの心のケアや暴力の予防の側面から考えると、キレ衝動を持っているキレ予備群を早めに発見することは重要なことであろう。「キレ衝動」の測定によって、深刻なストレス状態で自分をコントロールできなくなることを、すなわちキレる行動の前に、子どもたちが発する危険信号をキャッチすることによって、「暴力」として発動しないように工夫することができるし、またそうしなければ、子どもを含む社会生活も、子どもの教育と

いうものも成り立たない。また、子どもたちがキレたくなる原因を探索する際にも本尺度は有用であろうし、それによって予防にもつながることが期待される。

また、これまでの「キレる」ことに対する種々の意見は首肯できるところが多いが、これらの意見や観点は仮説の域を越えていなく、確証を得るためには、実証的研究が必要であろう。

そこで本研究ではその一歩として、まず、「キレ衝動」を測定するための尺度を作成し、その信頼性および妥当性を検討することを目的とする。なお本研究では、「キレ衝動」尺度の構成概念的妥当性を検討するために、状態不安と敵意的攻撃（敵意・いらだち）尺度を用い、次のような仮説を立てる。

(1) キレ衝動が高い生徒（キレ予備群）は、これまで何らかの形で自分を抑圧し我慢していたことが限界に達し、心のバランスの崩れた不安定な状態であるため、状態不安が高いであろう。

(2) キレ衝動が高い生徒は、攻撃性が高まっているため、他者に対し敵意を持ったり、いらだちを経験することが多いであろう。

方法

被調査者 首都圏の公立高等学校4校、計794名に対し実施された。学年・性別の構成はTable4-1に示す通りである。なお、状態不安尺度は、計206名（男子80名、女子126名）、敵意的攻撃尺度は計145（男子70名、女子75名）に対し、実施された。これらの高校の学力のレベルは「中の上」と思われる。

調査内容

(a) キレ衝動を測定する質問紙：項目の収集と整理は以下の方法により行

Table 4-1 キレ衝動の学年・性別被験者数および平均 (SD)

	男子		女子	
	人数	平均 (SD)	人数	平均 (SD)
高校1年生	122	18.88 (8.85)	120	17.87 (8.11)
2年生	125	17.65 (8.54)	140	18.10 (8.29)
3年生	123	17.85 (8.51)	164	18.01 (7.29)
全体	370		424	

われた。心理学専攻の大学生5名と心理学専攻の大学院生1名がキレた経験や状況について話し合い、「キレ衝動」を測定するための項目を23項目作成した。項目の作成の時に参加した心理学専攻の大学院生1名がさらに内容を検討し、重複していたり、適切でないと思われる項目を修正・削除した結果、8項目が残された。質問紙には「この質問文が最近のあなたの気持ちや身体の状態をどれほどよく表しているのかを判断し、当てはまる番号に○をつけてください」という教示文を与えた。回答形式は5件法を採用しており、「今の自分に非常にあてはまる」から「今の自分に全くあてはまらない」までの5段階に対し、5点～1点を与えた。

(b) 状態不安インベントリー：Spielberger, Gorsuch, & Lushene (1970) が作成した尺度を清水・今栄 (1981) が訳した20項目を4件法で評定した。「全くそうである」から「全くそうでない」までの4段階に対し、4点～1点を与えた。信頼性および妥当性は検証されている。

(c) 敵意的攻撃インベントリー：秦 (1990) が開発した8下位尺度のうち、敵意 (10項目) といらだち (8項目) を5件法で評定した。「そうだ」から「ちがう」までの5段階に対し、5点～1点を与えた。信頼性と内容的妥当性が検証されている。

調査方法 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

1. 「キレ衝動」尺度の項目分析および信頼性・妥当性の検討

キレ衝動尺度の8項目に対し因子分析を行った。主成分法により因子を抽

出したところ、固有値が1以上の因子は1因子であった。Table4-2に具体的項目と平均 (SD) , I-T 相関が示されている。

キレ衝動のクローンバックの α の値が.89で、I-T相関が.70~.82で十分な内的一貫性が存在しており、信頼性が認められた。妥当性の検討のためにキレ衝動の総得点と平行して実施された敵意的攻撃インベントリー (敵意, いらだち) および状態不安インベントリーとの相関関係を求めた結果、Table4-3に示すように敵意および状態不安との間には中の相関, いらだちとの間には高い相関が得られた。これらの値は、キレ衝動が高いものは敵意的攻撃性や状態不安が高いたらうという仮説を支持する結果であった。キレ衝動の妥当性が検証されたといえよう。

2. 「キレ衝動」の性差の検討

キレ衝動の性差と学年差を検討するために、学年×性の2要因分散分析を行った (Table4-1)。その結果、学年差と性差の両方とも有意な差が認められなかった。これまで、現象的には男子生徒の事件が目立っていたが、「キレそう」または「キラしたい」という衝動は女子生徒も男子生徒と違いがないということが明らかにされた。キレには性差があり、男子は比較的安定的なパターンが存在し、いわゆる「おとなしい子の爆発」であるが、女子のキレは急に保健室にいったベットに横になり、まったく動かず、視線は一点を見据えていて何を語りかけても何の反応もせず、1時間位休んだ後元に戻るといったようなキレ方もある (長谷川, 1998)。すなわち、女子も男子同様、キレ衝動を感じており、キレているが、目立つキレ方をする男子の方のキレ方だけが注目されているということが言えよう。

Table 4-2 キレ衝動尺度の項目, 平均 (SD) および I - T 相関係数

項 目	平均 (SD)	I - T 相関
1. 私はカッとになって自分を見失いそうなとき(こと)が多い。	2.31 (1.38)	.77
2. 私は自分で抑えきれないくらいの怒りを感じる時(こと)が多い。	2.11 (1.26)	.81
3. 私は怒りで頭が真っ白になりそうなとき(こと)が多い。	2.00 (1.13)	.76
4. 私はカッとになってまわりのことはどうでもよくなってしまいそうなとき(こと)が多い。	2.15 (1.30)	.82
5. 私はまわりの状況を考えず怒りを表現したいと思う時(こと)が多い。	2.29 (1.34)	.78
6. 私はいつかキレるだろうと思う時(こと)が多い。	2.30 (1.40)	.70
7. 私はもうこれ以上我慢できないと思う時(こと)が多い。	2.34 (1.34)	.80
8. 私は後で後悔するようなことを衝動的にってしまうかもしれないと思う時(こと)が多い。	2.72 (1.43)	.70
全 体	18.07 (8.21)	

Table 4-3 キレ衝動と敵意的攻撃(敵意, いらだち)および状態不安との相関係数

	敵意	いらだち	状態不安
キレ衝動	.37 ***	.70 ***	.43 ***

注) *** $p < .001$

2. 感情表出の制御と精神的健康（自尊感情，充実感，ストレス，キレ衝動）との関連 [研究4-2]

目的

感情表出の制御を多く行うことは本来の自分を抑えて表すことで，言わば仮面をかぶっている状態である。特に青年期は自我確立の時期であり，本当の自分でない自分を演じつづけることはさまざまな葛藤や精神的不適応を生じさせることが予想される。実際に，大学生を対象にネガティブ感情表出の制御と精神的健康との関連を検討した崔・新井（1998）の研究で，動機や場面によって違いが見られたものの，感情表出の制御を多く行うことは，精神的健康上望ましくないことが示唆された。本研究では，中学生と高校生を対象に感情表出の制御と精神的健康との関連について検討する。

方法

被調査者 東京都公立中学校3校 1年生238名（男子124名，女子114名），2年生153名（男子78名，女子75名），3年生167名（男子93名，女子74名），東京都公立高等学校2校 1年生246名（男子124名，女子122名），2年生257名（男子125名，女子132名），3年生290名（男子128名，女子162名）。これらの高校の学力のレベルは「中の上」と思われる。

調査内容

- (a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。
- (b) 自尊感情：Rosenberg（1965）の作成した尺度を山本・松井・山成（1982）が訳した10項目を5件法で評定した。「当てはまる」から「全く当てはまら

ない」までの5段階に対し5点～1点を与えた。信頼性と妥当性は検証されている。

(c) 充実感尺度：西平(1979)の現代青年の心情モデルをもとに、大野(1984)が青年の充実感を青年の信頼、自立、連帯の3側面から測定した尺度の「充実感気分—退屈・空虚感」, 「自立・自信—甘え・自信のなさ」, 「連帯—孤立」, 「信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散」の4つの因子のうち「充実感気分—退屈・空虚感」を使用した。「今の自分に非常に当てはまる」から「今の自分に全く当てはまらない」までの5段階に対し、5点～1点を与えた。信頼性と内容的妥当性が検証されている。

(d) ストレス反応尺度：岡安・嶋田・坂野(1992)によって作成された、中学生用ストレス反応尺度の4つの下位尺度(不機嫌・怒り, 抑鬱不安, 無気力反応, 身体反応)から因子負荷が高い上位3項目ずつ合計12項目を使用した。5件法で評定しており、「今の自分に非常に当てはまる」から「今の自分に全く当てはまらない」までの5段階に対し、5点～1点を与えた。信頼性と内容的妥当性が検証されている。

(e) キレ衝動尺度：研究4-1で作成されたものを使用した。

調査方法 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

まず、感情表出の制御の各下位尺度の得点を高群(H)・中群(M)・低群(L)の3群にわけ、感情表出の制御の各下位尺度得点の上位30%、中位30%、下位30%をそれぞれ高群、中群、低群とした。残りの10%は分析に使

用されていない。なお、各々の因子における感情表出の制御・学校段階・性別被験者数は Table4-4, 4-5 に示されている通りである。

それぞれの因子における高・中・低群の各項目の合計による区分得点は、第1因子（高群 19 以上, 中群 18 未満 14 以上, 低群 14 未満）、第2因子（高群 12 以上, 中群 11 未満 8 以上, 低群 7 未満）、第3因子（高群 14 以上, 中群 14 未満 10 以上, 低群 10 未満）、第4因子（高群 12 以上, 中群 11 未満 8 以上, 低群 8 未満）、第5因子（高群 5 以上, 中群 4 未満 3 以上, 低群 3 未満）である。

次に、感情表出の制御と精神的健康との関連を検討するために、感情表出の制御（H・M・L）×学校段階（中学生・高校生）×性（男・女）の3要因分散分析を行った（Table4-6~4-10）。なお、本研究の多重比較には、すべてLSD法が用いられた。

分散分析の結果、まず、自尊感情では、第1因子の「八方美人的制御」（ $F(2,1191)=3.51, p<.05$ ）、第3因子の「自己抑圧的制御」（ $F(2,1341)=2.73, p<.10$ ）、第4因子の「同調のための抑制的制御」（ $F(2,1220)=5.23, p<.01$ ）において感情表出の制御と学校段階の交互作用が見られた。また、第2因子の「非仲間志向的制御」（ $F(2,1120)=13.34, p<.001$ ）と第5因子の「同調のための強調的制御」（ $F(2,1018)=9.16, p<.01$ ）において感情表出の制御の主効果が認められた。5つの因子すべてにおいて性差が認められ、男子が女子より自尊感情の得点が高いという結果となった。

単純主効果の検定および多重比較を行った結果、第1因子の「八方美人的制御」と第3因子の「自己抑圧的制御」においては高校生の低群が、第4因子の「同調のための抑制的制御」においては中学生と高校生の低群が、他の群と比べ自尊感情が高い結果となった。また、感情表出の制御差が認められた第2因子「非仲間志向的制御」と第5因子「同調のための強調的制御」に

Table4-4 自尊感情, ストレスおよびキレ衝動における感情表出の制御・学校段階・性別被調査者数

	中						高					
	男			女			男			女		
	H	M	L	H	M	L	H	M	L	H	M	L
第1因子	99	77	86	102	56	74	101	113	117	140	128	110
第2因子	102	89	58	65	68	83	131	106	84	71	134	141
第3因子	88	121	92	121	62	75	137	122	114	198	124	99
第4因子	136	81	54	79	80	69	125	130	90	117	147	124
第5因子	122	37	97	103	29	58	114	36	137	130	49	118

注) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

Table4-5 充実感における感情表出の制御・学校段階・性別被調査者数

	中						高					
	男			女			男			女		
	H	M	L	H	M	L	H	M	L	H	M	L
第1因子	82	77	85	103	73	66	89	86	88	114	114	68
第2因子	140	67	37	109	84	53	109	96	66	59	99	108
第3因子	74	111	100	102	98	78	100	116	84	149	105	59
第4因子	124	78	59	95	100	62	102	109	57	83	134	75
第5因子	70	18	135	122	26	55	102	26	82	78	39	78

注) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

第4章 感情表出の制御と内的適応感および社会的適応感との関連

Table 4-6 自尊感情、充実感、ストレスおよびキレ衝動における感情表出の制御の各群の平均(SD)

		自尊感情	充実感	ストレス	キレ衝動	
第1因子	中	H	31.46 (6.73)	25.01 (5.89)	27.96 (13.42)	19.25 (8.40)
		男 M	31.18 (6.98)	25.64 (6.78)	24.49 (10.36)	17.05 (7.53)
		L	31.97 (7.89)	24.01 (7.66)	24.90 (10.96)	18.60 (8.82)
		H	29.26 (6.64)	22.59 (6.93)	29.45 (12.85)	18.59 (8.33)
		女 M	31.46 (7.40)	23.50 (5.68)	23.75 (11.26)	17.07 (7.44)
		L	29.87 (7.95)	23.81 (6.47)	26.97 (12.13)	17.28 (7.53)
	高	H	29.84 (7.31)	22.25 (7.01)	31.62 (12.87)	19.98 (9.33)
		男 M	31.08 (8.27)	21.79 (6.13)	29.70 (11.85)	17.68 (8.60)
		L	32.97 (6.98)	19.85 (6.39)	27.91 (12.14)	16.43 (8.02)
		H	28.15 (6.59)	22.58 (7.01)	33.19 (10.24)	19.28 (8.10)
		女 M	28.30 (6.54)	22.81 (6.51)	31.52 (11.38)	17.20 (7.41)
		L	30.87 (7.14)	22.51 (6.25)	29.19 (11.44)	17.13 (7.80)
第2因子	中	H	30.59 (7.49)	24.61 (6.22)	28.44 (12.53)	19.78 (7.90)
		男 M	32.47 (6.26)	24.25 (7.26)	24.91 (10.62)	17.17 (7.48)
		L	33.32 (7.35)	26.59 (8.22)	22.57 (9.03)	15.72 (8.01)
		H	28.83 (7.29)	22.99 (6.04)	32.95 (13.08)	21.87 (8.19)
		女 M	29.39 (7.00)	23.32 (6.11)	27.36 (11.75)	16.92 (7.31)
		L	30.97 (8.31)	23.45 (7.09)	23.71 (11.95)	15.63 (7.53)
	高	H	29.41 (6.92)	21.65 (6.26)	34.07 (12.04)	21.24 (8.94)
		男 M	30.30 (7.17)	21.42 (6.86)	28.56 (11.56)	16.78 (7.97)
		L	32.46 (8.73)	21.39 (7.15)	29.24 (13.34)	16.36 (7.90)
		H	26.85 (6.35)	21.11 (6.05)	36.00 (9.18)	20.50 (7.83)
		女 M	28.84 (6.61)	23.19 (6.31)	32.77 (11.32)	18.41 (7.51)
		L	30.07 (7.42)	23.67 (7.16)	28.25 (10.48)	16.31 (7.89)
第3因子	中	H	31.07 (7.40)	24.71 (7.20)	29.17 (13.43)	18.54 (8.80)
		男 M	30.92 (6.99)	25.09 (6.07)	26.23 (10.95)	18.82 (7.23)
		L	32.55 (6.96)	24.56 (7.08)	23.32 (10.23)	17.20 (8.32)
		H	29.20 (7.34)	22.97 (6.76)	29.27 (12.68)	18.60 (7.94)
		女 M	29.75 (7.25)	22.18 (5.68)	26.93 (12.23)	17.46 (7.77)
		L	30.29 (8.16)	24.74 (6.46)	25.60 (11.77)	17.79 (8.06)
	高	H	28.66 (7.58)	20.94 (6.43)	32.62 (11.91)	17.76 (7.73)
		男 M	31.16 (6.73)	22.49 (6.40)	28.50 (11.25)	18.20 (8.74)
		L	33.29 (7.69)	20.09 (6.82)	28.92 (13.61)	18.31 (9.46)
		H	27.92 (6.47)	21.62 (6.42)	32.53 (10.90)	17.26 (7.86)
		女 M	29.26 (6.97)	22.84 (6.09)	30.17 (10.39)	17.83 (7.45)
		L	30.22 (7.48)	23.77 (7.41)	31.86 (12.48)	19.32 (8.11)
第4因子	中	H	30.81 (6.81)	25.05 (6.44)	26.76 (11.79)	18.50 (8.07)
		男 M	30.96 (7.48)	25.02 (5.87)	27.67 (12.69)	18.76 (8.53)
		L	33.03 (7.21)	24.55 (8.39)	24.20 (10.04)	17.83 (7.96)
		H	29.16 (6.40)	22.60 (6.91)	29.56 (12.69)	18.15 (8.42)
		女 M	28.93 (6.93)	23.57 (5.88)	27.03 (11.82)	18.32 (7.49)
		L	31.57 (8.83)	23.30 (6.70)	26.45 (12.70)	17.47 (8.05)
	高	H	28.83 (6.89)	21.26 (6.78)	30.32 (11.55)	18.34 (8.52)
		男 M	32.60 (7.80)	20.88 (6.63)	29.27 (12.63)	18.25 (9.07)
		L	31.70 (7.87)	20.82 (6.78)	30.04 (12.76)	17.80 (8.71)
		H	27.32 (6.87)	21.28 (5.59)	33.06 (11.18)	18.65 (8.24)
		女 M	29.55 (5.89)	22.35 (6.56)	31.71 (10.77)	17.04 (7.48)
		L	30.31 (7.46)	24.29 (7.39)	30.91 (11.25)	18.27 (8.04)
第5因子	中	H	31.01 (6.75)	24.87 (6.00)	28.59 (12.69)	19.09 (8.17)
		男 M	31.83 (6.49)	24.00 (6.07)	23.90 (9.89)	16.72 (6.28)
		L	32.24 (8.08)	24.40 (8.86)	24.88 (10.88)	18.30 (8.89)
		H	28.65 (6.97)	23.32 (6.53)	31.12 (11.88)	19.86 (7.83)
		女 M	31.03 (7.05)	23.26 (6.57)	25.41 (12.24)	16.82 (8.54)
		L	31.32 (9.15)	23.84 (7.11)	25.25 (13.38)	16.40 (8.20)
	高	H	29.69 (7.12)	22.36 (6.46)	33.80 (12.33)	21.16 (9.26)
		男 M	32.22 (6.82)	22.38 (6.13)	24.30 (10.14)	14.00 (6.81)
		L	31.67 (8.18)	20.06 (6.89)	29.08 (12.28)	16.72 (8.12)
		H	27.87 (7.48)	22.57 (6.47)	32.26 (10.98)	19.13 (8.02)
		女 M	29.81 (6.00)	22.41 (6.65)	30.44 (9.99)	18.62 (7.65)
		L	30.29 (7.15)	23.43 (7.49)	30.08 (12.43)	16.54 (8.13)

注) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強制的制御」。

Table 4-7 感情表出の制御, 学校段階, 性別の自尊感情得点についての分散分析の結果

		自尊感情	一元配置分散分析	
第1因子	1次交互	表・制	7.46 **	
		学校段階差	2.18	
		性差	21.99 ***	女<男
		表・制×学校段階	3.51 *	高H<(中H・中M・高L) 高M<(中M・高L) 中H<高L
		表・制×性	.09	
		学校段階×性	.70	
		2次交互	1.63	
第2因子	1次交互	表・制	13.34 ***	(M・H)<L
		学校段階差	8.17 **	高<中
		性差	25.27 ***	女<男
		表・制×学校段階	.10	
		表・制×性	.13	
		学校段階×性	.11	
		2次交互	.64	
第3因子	1次交互	表・制	14.03 ***	
		学校段階差	2.24	
		性差	18.99 ***	女<男
		表・制×学校段階	2.73 †	高H<(中H・中M・中L・高M・高L) 中H<(高L・中L) 高M<高L
		表・制×性	1.29	
		学校段階×性	.00	
		2次交互	.66	
第4因子	1次交互	表・制	14.00 ***	
		学校段階差	2.72	
		性差	22.66 ***	女<男
		表・制×学校段階	5.23 **	高H<(中H・中M・中L・高M・高L) (中H・中M)<中L
		表・制×性	.91	
		学校段階×性	.11	
		2次交互	.20	
第5因子	1次交互	表・制	9.16 ***	H<(M・L)
		学校段階差	3.21	
		性差	13.01 ***	女<男
		表・制×学校段階	.11	
		表・制×性	.37	
		学校段階×性	.02	
		2次交互	.32	

注1) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

2) †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 4-8 感情表出の制御, 学校段階, 性別の充実感得点についての分散分析の結果

		充実感	一元配置分散分析	
第1因子	1次交互	表・制	2.51	
		学校段階差	25.55 ***	
		性差	.23	
		表・制×学校段階	.49	
		表・制×性	3.97 *	男L<(男M・男H)
		学校段階×性	8.62 **	高男<(高女・中女・中男) (中女・高女)<中男
		2次交互	.03	
第2因子	1次交互	表・制	1.29	
		学校段階差	21.58 ***	
		性差	.08	
		表・制×学校段階	.16	
		表・制×性	1.66	
		学校段階×性	6.51 *	高男<(高女・中女・中男) (中女・高女)<中男
		2次交互	1.22	
第3因子	1次交互	表・制	.64	
		学校段階差	30.54 ***	
		性差	.18	
		表・制×学校段階	2.29	高H<
		表・制×性	5.30 **	女H<(男H・女L) (男L・男H・女M)<女L
		学校段階×性	10.92 **	高男<(高女・中女・中男) (中女・高女)<中男
		2次交互	.20	
第4因子	1次交互	表・制	.78	
		学校段階差	31.03 ***	
		性差	.13	
		表・制×学校段階	1.78	高H<
		表・制×性	2.57 †	女H<(男H・女L)
		学校段階×性	10.49 **	高男<(高女・中女・中男) (中女・高女)<中男
		2次交互	.45	
第5因子	1次交互	表・制	.61	
		学校段階差	16.47 ***	
		性差	.01	
		表・制×学校段階	.48	
		表・制×性	2.50 †	男L<男H
		学校段階×性	3.56 †	高男<(高女・中女・中男) (中女・高女)<中男
		2次交互	.78	

注1) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強制的制御」。

2) †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 4-9 感情表出の制御, 学校段階, 性別のストレス得点についての分散分析の結果

		ストレス	一元配置分散分析
第1因子	1次交互	表・制	9.12 *** (L・M)<H
		学校段階差	33.21 *** 中<高
		性差	4.39 * 男<女
		表・制×学校段階	2.14
		表・制×性	.02
		学校段階×性	.00
		2次交互	.54
第2因子	1次交互	表・制	31.17 *** L<(M・H)
		学校段階差	45.33 *** 中<高
		性差	9.80 ** 男<女
		表・制×学校段階	.25
		表・制×性	2.30
		学校段階×性	.80
		2次交互	.47
第3因子	1次交互	表・制	10.04 *** (L・M)<H
		学校段階差	32.01 *** 中<高
		性差	2.59
		表・制×学校段階	1.93
		表・制×性	.92
		学校段階×性	.00
		2次交互	.09
第4因子	1次交互	表・制	1.78
		学校段階差	30.09 *** 中<高
		性差	6.88 ** 男<女
		表・制×学校段階	.32
		表・制×性	.23
		学校段階×性	.05
		2次交互	.64
第5因子	1次交互	表・制	15.84 *** (L・M)<H
		学校段階差	20.98 *** 中<高
		性差	2.38
		表・制×学校段階	.21
		表・制×性	1.29
		学校段階×性	.88
		2次交互	2.21

男: 高M<(中L・中H・高H)
 高L<(中H・高H)
 (中L・中M)<高H
 女: L<H

注1) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美入的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強制的制御」。

2) *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 4-10 感情表出の制御, 学校段階, 性別のキレ衝動得点についての分散分析の結果

		キレ衝動	一元配置分散分析
第1因子	1次交互	表・制	8.60 ***
		学校段階差	.01
		性差	.48
		表・制×学校段階	1.20
		表・制×性	.21
		学校段階×性	.11
		2次交互	.81
第2因子	1次交互	表・制	33.65 ***
		学校段階差	.76
		性差	1.06
		表・制×学校段階	.04
		表・制×性	.34
		学校段階×性	.06
		2次交互	1.99
第3因子	1次交互	表・制	.23
		学校段階差	.14
		性差	.07
		表・制×学校段階	2.57 †
		表・制×性	.74
		学校段階×性	.13
		2次交互	.28
第4因子	1次交互	表・制	.72
		学校段階差	.11
		性差	.29
		表・制×学校段階	.35
		表・制×性	.32
		学校段階×性	.00
		2次交互	.33
第5因子	1次交互	表・制	15.25 ***
		学校段階差	.05
		性差	.04
		表・制×学校段階	.43
		表・制×性	2.83 †
		学校段階×性	.00
		2次交互	4.15 *

男: 高M < (中L・中H・高H)
 高L < (中H・高H)
 (中L・中M) < 高H
 女: L < H

注1) 各因子は, 実際は下位尺度であるが, 便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」, 第2因子「非仲間志向的制御」, 第3因子「自己抑圧的制御」, 第4因子「同調のための抑制的制御」, 第5因子「同調のための強制的制御」。

2) †p < .10, *p < .05, ***p < .001

において、第2因子「非仲間志向的制御」では低群が中群と高群より、第5因子「同調のための強調的制御」では中群と低群が高群より自尊感情が高かった (Fig.4-1)。

次に、充実感では、第1因子「八方美人的制御」 ($F(2,957)=3.97, p<.05$)、第3因子「自己抑圧的制御」 ($F(2,1078)=5.30, p<.01$)、第4因子「同調のための抑制的制御」 ($F(2,986)=2.57, p<.10$)、第5因子「同調のための強調的制御」 ($F(2,755)=2.50, p<.10$) において感情表出の制御と性の交互作用が見られた。

また、すべての因子において学校段階と性の交互作用が見られた (第1因子: ($F(1,957)=8.62, p<.01$), 第2因子: ($F(1,936)=6.51, p<.05$), 第3因子: ($F(1,1078)=10.92, p<.01$), 第4因子: ($F(1,986)=10.49, p<.01$), 第5因子: ($F(1,755)=3.56, p<.10$))。高校の男子が最も充実感が低く、中学校の男子が他の群の生徒より充実感が高いという結果であった。

感情表出の制御と性の交互作用が見られたところに対し単純主効果の検定および多重比較を行った結果、第1因子「八方美人的制御」と第5因子「同調のための強調的制御」においては男子の場合、中群または高群が低群より充実感が高いという結果となった。第3因子「自己抑圧的制御」では女子の低群が男子または女子の中群より充実感が高く、第4因子「同調のための抑制的制御」では男子の高群と女子の低群が女子の高群より充実感が高い結果であった。友人に同調して同じ感情を共有したり、友人に対するポジティブ感情を強めて表すことを多く行う男子はそうでない男子より、生活が面白く、はりがあると感じているという結果であった (Fig.4-2)。

ストレスでは、第1因子「八方美人的制御」 ($F(2,1191)=9.12, p<.001$)、第2因子「非仲間志向的制御」 ($F(2,1120)=31.17, p<.001$)、第3因子「自己抑圧的制御」 ($F(2,1341)=10.04, p<.001$)、第5因子「同調のための強調

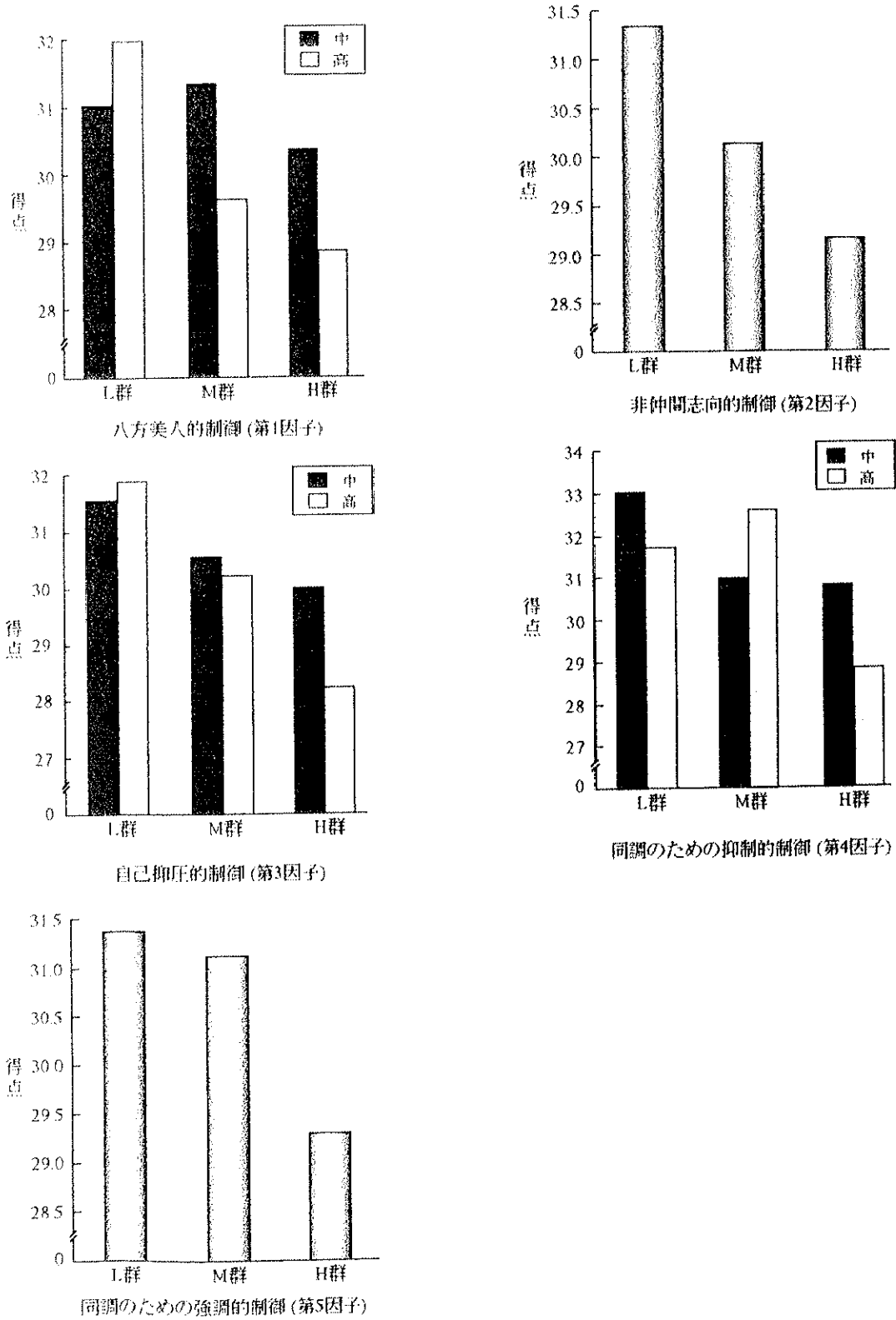


Figure 4-1 感情表出の制御の各群における自尊感情の平均値

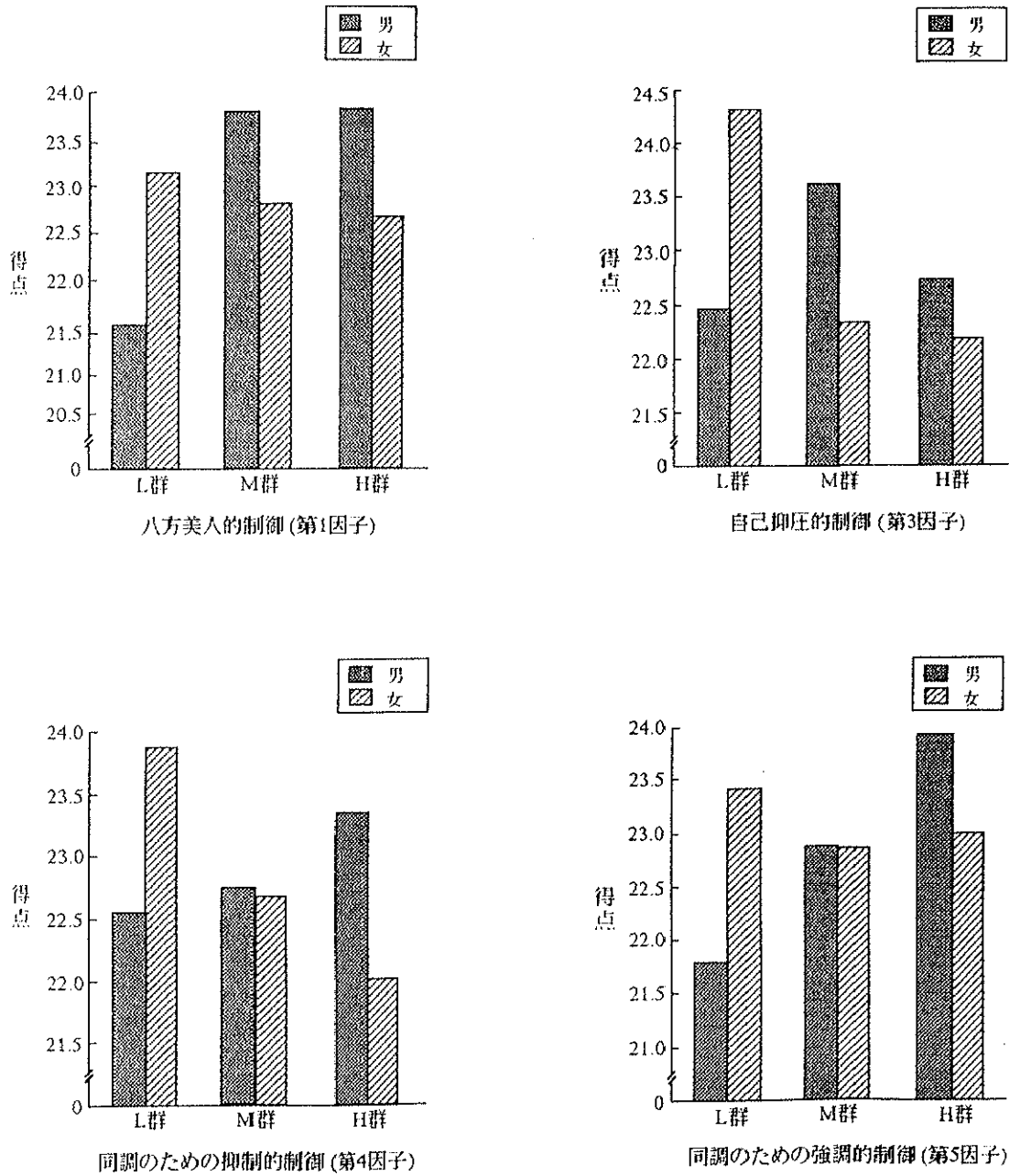


Figure 4-2 感情表出の制御の各群における充実感の平均値

的制御」 ($F(2,1018)=15.84, p<.001$) で感情表出の制御差が認められた。

また、5つの因子すべてにおいて学校段階の主効果が認められ(第1因子： $F(1,1191)=33.21, p<.001$)，第2因子： $F(1,1120)=45.33, p<.001$)，第3因子： $F(1,1341)=32.01, p<.001$)，第4因子： $F(1,1220)=30.09, p<.001$)，第5因子： $F(1,1018)=20.98, p<.001$)，高校生が中学生よりストレスが高いことが示された。性差が見られた第1因子「八方美人的制御」($F(1,1191)=4.39, p<.05$)，第2因子「非仲間志向的制御」($F(1,1120)=9.80, p<.01$)，第4因子「同調のための抑制的制御」($F(1,1220)=6.88, p<.01$)において女子が男子よりストレスが高いという結果であった。

感情表出の制御の主効果が認められた第1因子の「八方美人的制御」，第2因子の「非仲間志向的制御」，第3因子の「自己抑圧的制御」，第5因子の「同調のための強調的制御」について多重比較を行った結果，すべてにおいて高群の方が他の群よりストレスが高いことが示された (Fig.4-4：92頁参照)。

最後にキレ衝動においては，第1因子の「八方美人的制御」($F(2,1191)=8.60, p<.001$)と第2因子の「非仲間志向的制御」($F(2,1120)=33.65, p<.001$)において感情表出の制御差が認められ，第3因子の「自己抑圧的制御」($F(2,1018)=2.75, p<.10$)において感情表出の制御と学校段階の交互作用が認められ，第5因子「同調のための強調的制御」($F(2,1018)=4.15, p<.05$)で2次交互作用が認められた。

まず，第1因子，第2因子，第3因子に対して単純主効果の検定および多重比較を行った結果，第1因子「八方美人的制御」と第2因子「非仲間志向的制御」の高群が低群や中群よりキレ衝動が高いことが明らかにされた。第3因子「自己抑圧的制御」では高校生の低群が高校生の高群よりキレ衝動が高い結果となった。第5因子「同調のための強調的制御」では，性別に感情表出の制御と学校段階の単純交互作用の分析をした。男子においては感情表

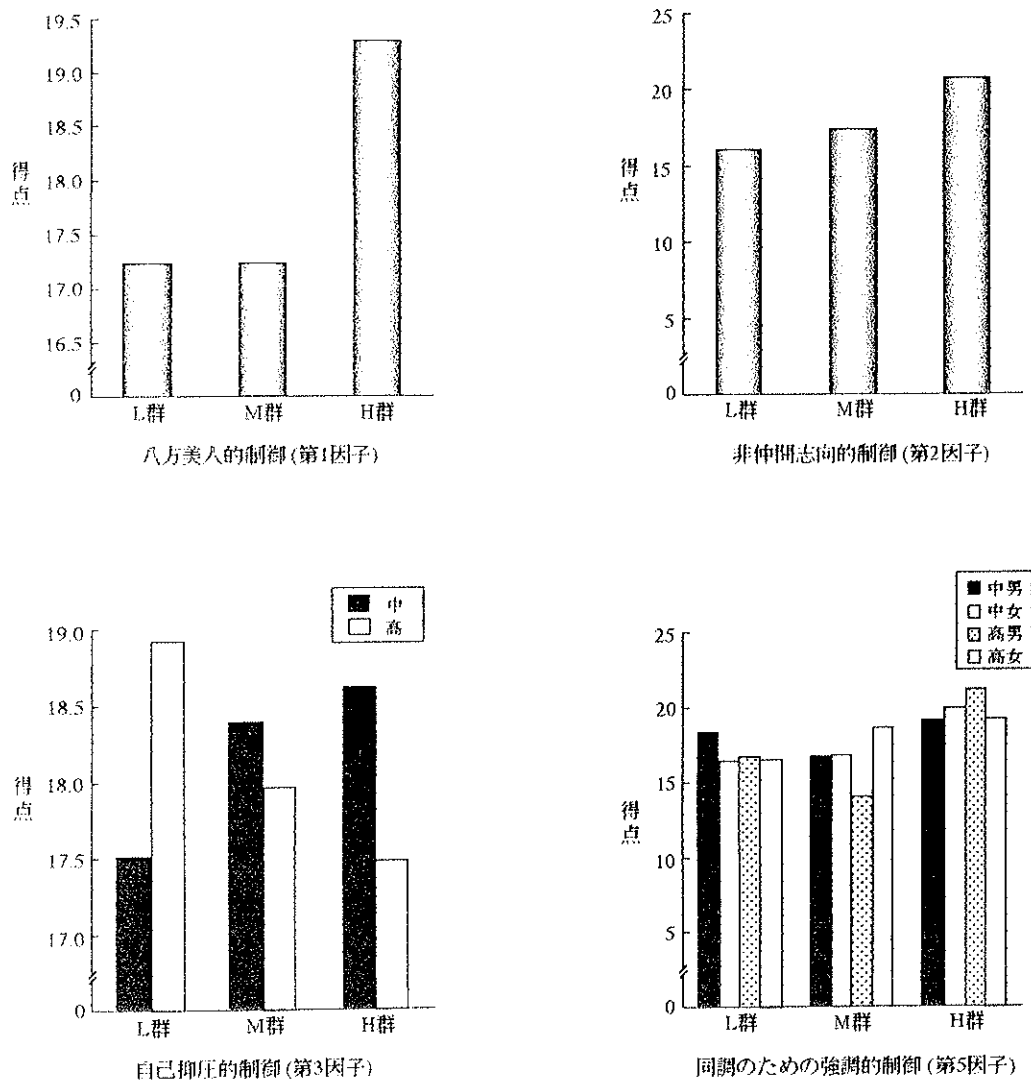


Figure 4-3 感情表出の制御の各群におけるキレの平均値

出の制御と学校段階の交互作用 ($F(2,521)=3.65, p<.05$) が有意で、女子においては感情表出の制御の主効果 ($F(2,479)=6.62, p<.01$) のみが有意であった。そこで、単純主効果検定および多重比較を行った結果、男子においては高校生の高群が他の群と比べキレ衝動が高いこと、そして、女子においては高群が低群よりキレ衝動が高いことが示された (Fig.4-3：90頁参照)。

以上の結果を因子別にまとめると、第1因子の「八方美人的制御」を多く行う人は自尊感情は低く、ストレスおよびキレ衝動が高いという結果であったが、充実感においては男子の場合、感情表出の制御の中群と高群が充実感が高いという結果であった。充実感尺度の項目としては「生活が楽しい」「生活にはりがある」などの項目で構成されており、表面だけであるとしても友人と一緒に嬉しさや好感、悲しさなどを共有することや友人に好感を持っているように表出することは、楽しいと感じるということであろう。しかし、「八方美人的制御」を多く行うことは、その場では楽しさは感じていても、それが次第に自尊感情を低め、ストレスとキレ衝動を高める作用をするのではないかと思われる。

次に第2因子の「非仲間志向的制御」を多く行う人は自尊感情が低く、ストレスおよびキレ衝動が高いという結果であった。素直に友達に対する好感を表せないこと、そして友達に対しネガティブ感情をより強めて表してしまうことは対人関係スキルの未熟さ、または対人関係に対しなげやりになっているような様子がかがえる。この感情表出の制御を多く使用することは、精神的健康にマイナスにつながるとと思われる。

第3因子の「自己抑圧的制御」を多く行う人は自尊感情が低く、女子の場合充実感が低く、ストレスが高いという結果であった。ただし、キレ衝動においては高校生の場合、制御を少なく行う方がキレ衝動が高いという結果であった。研究3の発達的变化からも見られるように、高校生は第3因子にお

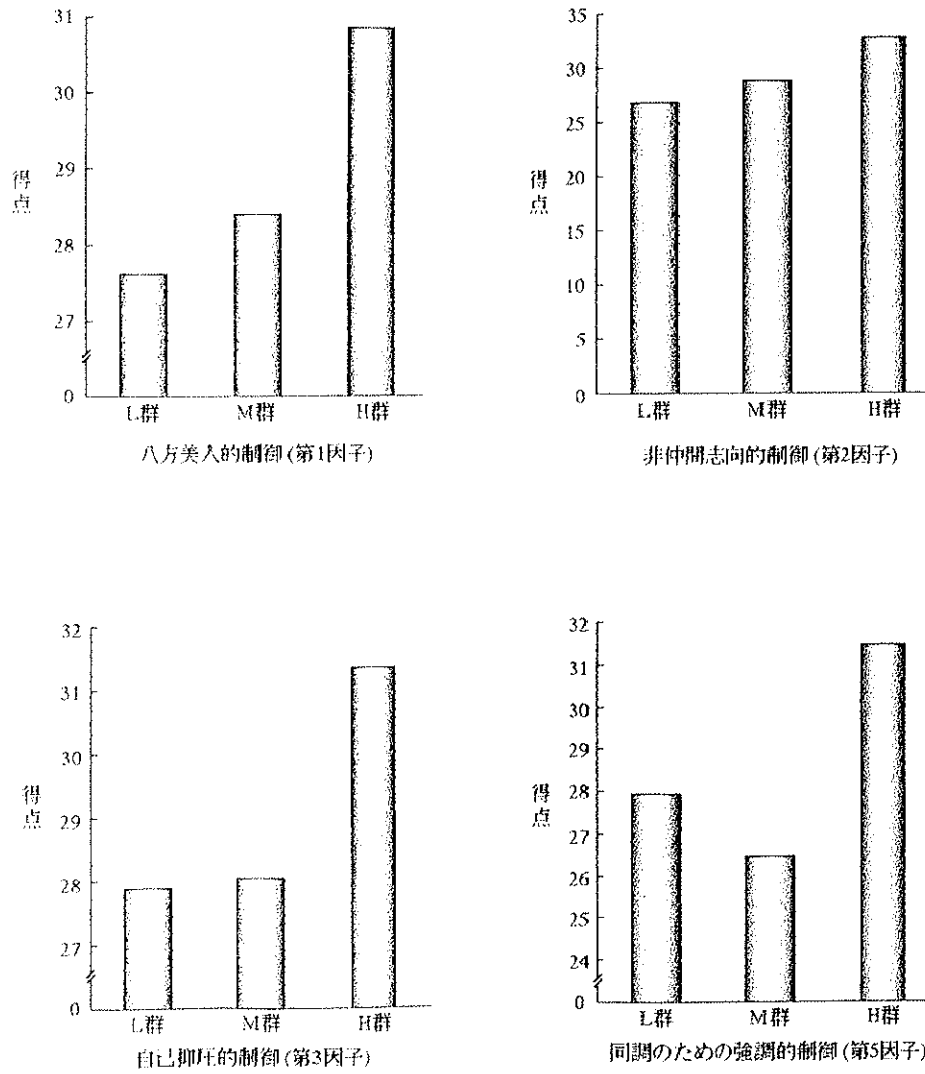


Figure 4-4 感情表出の制御の各群におけるストレスの平均値

いて中学生よりも感情表出の制御を多く行っており、やりとりの相手になっている友達に対するネガティブ感情を直接表すことは禁止区域に入っているようである。こういう状況下で友達本人に対するネガティブ感情を表す人はもともと攻撃性の高い人である可能性が考えられる。

第4因子「同調のための抑制的制御」を多く行う人が、自尊感情が低いことが示された。充実感においては、「同調のための抑制的制御」を多く行う男子と少なく行う女子が多く行う女子より充実感が高いという結果であった。

第5因子「同調のための強調的制御」を多く行う人は自尊感情が低く、ストレスが高いという結果であった。充実感においては男子の場合、「同調のための強調的制御」を中程度行うほうが少なく行うより充実感を感じるという結果となった。第1因子、第4因子での結果と統合して考えると、男子の場合は本当の感情でないにしても友人と感情を共にすることで生活の楽しさやはり合いを感じているということが示された。

研究4の要約

研究4-1でキレ衝動を測定するための8項目からなる尺度が作成され、その信頼性と妥当性が確認された。研究4-2では、中学・高校生の感情表出の制御と内的適応感（精神的健康）との関連について検討した。感情表出の制御を多く行う生徒は、低い自尊感情、高いストレスおよび高いキレ衝動（第3因子は除外）を持っていることが確認された。ただし、充実感においては感情表出の制御の下位尺度別に著しい性差が見られた。これらの結果から、精神的健康において感情表出の制御を多く行うことは望ましくないことが推測される。

第2節 感情表出の制御と友人関係における満足感との関連 [研究5]

目的

これまで多くの東洋社会では、自分が感じた感情をそのまま表すより、抑制したり相手に合わせたりする方が、「奥深い」または「礼儀正しい」というポジティブな印象で社会に受け入れられてきた。大人の目から感情の受け手になって見れば、大人が送ったメッセージに対し喜びや好感を表し、話を合わせてくれ、むっとした顔や嫌な気持ちなど見せない子は、接しやすいし、「気持ちのいい子」と思うであろう。また、同じ年ごろの友達や仲間との表面的なトラブルや葛藤も少ないであろう。

しかし、そういう表面的に平和な姿の内面はどうであろうか。さらに、青年の心の成長において重要な人間関係である友人関係においてでさえも自分を出さず、深刻さを避けようとするのが最近の青年の特徴として指摘されている。すなわち、最近の青年はありのままの自分を表出し、たとえそれによって葛藤が生まれてもそこから人間関係を学び、それが自分の成長につながることを経験することが少なくなりつつある。さらに、青年にとって他人への信頼感や自信感に繋がる経験として受容を経験することが重要であるが、いつも自分の感情を出さない青年は、ありのままの自分をそのまま表わしても自分を受け入れてくれるような存在を見つけることも困難であろう。

また、井上(1966)が指摘しているように、友人関係の特質が児童期の「生活の友達」から内面的なことを求める「心の友」へと変わる発達的变化を考えても、お互い傷つくことを恐れ、表面的な付き合いをしているような現代の青年の友人関係では「心の友」への変化も難しいであろう。すなわち、感情表出の制御を多く行うことは友人関係における満足感が得られにくいこと

が考えられる。そこで、本研究では中学生と高校生を対象に感情表出の制御と友人関係の適応感との関連について検討を行う。

方法

被調査者 東京都公立中学校1校 1年生227名(男子109名,女子118名),2年生168名(男子87名,女子81名),3年生168名(男子86名,女子82名),東京都公立高等学校1校 1年生263名(男子127名,女子136名),2年生194名(男子100名,女子94名),3年生182名(男子90名,女子92名)。これらの高校の学力のレベルは「中の上」と思われる。

調査内容

(a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。

(b) 友人関係の満足感：内田(1990)が青年期の全般的な生活感情の構造を明らかにするために作成した生活感情尺度の中から、友人関係における満足感を調べるため、「対人関係(友人関係)の領域」の8項目を使用した。5件法を採用しており、「当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階に対し、5点～1点を与えた。信頼性と妥当性は検証されている。

調査方法 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

まず、感情表出の制御の各下位尺度の得点を高群(H)・中群(M)・低群(L)の3群にわけ、友人関係の満足感得点における差を分析した。感情

表出の制御の各下位尺度得点の上位 30%，中位 30%，下位 30%をそれぞれ高群，中群，低群とした。

それぞれの因子における高・中・低群の各項目の合計による区分得点は，第 1 因子（高群 19 以上，中群 18 未満 14 以上，低群 14 未満），第 2 因子（高群 12 以上，中群 11 未満 8 以上，低群 7 未満），第 3 因子（高群 14 以上，中群 14 未満 10 以上，低群 10 未満），第 4 因子（高群 12 以上，中群 11 未満 8 以上，低群 8 未満），第 5 因子（高群 5 以上，中群 4 未満 3 以上，低群 3 未満）である。なお，各々の因子における感情表出の制御・学校段階・性別被調査者数は Table4-11 に示されている通りである。

次に，感情表出の制御と友人関係の適応感との関連を検討するために，感情表出の制御（H・M・L）×学校段階（中学生・高校生）×性（男子・女子）の 3 要因分散分析を行った（Table4-12, 4-13）。なお，本研究の多重比較には，すべて LSD 法が用いられた。

まず，友人関係の満足感においては第 2 因子の「非仲間志向的制御」($F(2,936)=27.57, p<.001$) と第 4 因子の「同調のための抑制的制御」($F(2,986)=4.03, p<.05$) において感情表出の制御の主効果が認められた。第 3 因子の「自己抑圧的制御」($F(2,1018)=3.18, p<.05$) で感情表出の制御と性の交互作用が認められた。

また，第 1 因子の「八方美人的制御」($F(1,957)=3.20, p<.10$)，第 2 因子の「非仲間志向的制御」($F(1,936)=3.58, p<.10$)，第 3 因子の「自己抑圧的制御」($F(1,1078)=5.83, p<.05$)，第 4 因子の「同調のための抑制的制御」($F(1,986)=3.67, p<.10$) で学校段階と性の交互作用が認められた。単純主効果の検定の結果，高校生の女子が高校生の男子より満足感が高いことが示された。

次に，感情表出の制御の主効果が認められた第 2 因子の「非仲間志向的制

Table4-11 友人関係の満足感における感情表出の制御・学校段階・性別被調査者数

	中						高					
	男			女			男			女		
	H	M	L	H	M	L	H	M	L	H	M	L
第1因子	82	77	85	103	73	66	89	86	88	114	114	68
第2因子	140	67	37	109	84	53	109	96	66	59	99	108
第3因子	74	111	100	102	98	78	100	116	84	149	105	59
第4因子	124	78	59	95	100	62	102	109	57	83	134	75
第5因子	70	18	135	122	26	55	102	26	82	78	39	78

注) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

Table 4-12 友人関係の満足感における感情表出の制御の各群の平均 (SD)

			友人関係の満足感	
第1因子	中	男	H	28.39 (5.62)
			M	28.57 (5.53)
			L	27.58 (6.92)
		女	H	28.20 (6.16)
			M	29.06 (4.97)
			L	28.03 (6.72)
	高	男	H	27.82 (5.92)
			M	28.02 (5.25)
			L	26.02 (7.61)
		女	H	27.76 (6.39)
			M	28.72 (6.13)
			L	29.19 (6.09)
第2因子	中	男	H	26.40 (5.91)
			M	28.66 (5.55)
			L	31.27 (6.02)
		女	H	27.01 (6.11)
			M	27.92 (5.93)
			L	31.00 (5.77)
	高	男	H	26.06 (6.45)
			M	27.42 (6.44)
			L	29.13 (6.53)
		女	H	27.59 (5.26)
			M	27.86 (6.41)
			L	30.79 (5.87)
第3因子	中	男	H	27.62 (6.37)
			M	27.74 (5.18)
			L	28.78 (6.74)
		女	H	27.80 (6.32)
			M	28.03 (6.41)
			L	29.37 (5.51)
	高	男	H	26.63 (6.24)
			M	27.75 (5.92)
			L	27.42 (6.89)
		女	H	26.93 (6.04)
			M	28.96 (5.92)
			L	31.67 (5.56)
第4因子	中	男	H	27.66 (6.05)
			M	28.67 (5.45)
			L	28.52 (6.86)
		女	H	28.30 (6.55)
			M	27.83 (5.82)
			L	29.37 (6.12)
	高	男	H	26.85 (6.63)
			M	27.25 (5.90)
			L	27.98 (7.39)
		女	H	27.11 (6.30)
			M	28.64 (6.00)
			L	30.50 (5.63)
第5因子	中	男	H	27.89 (5.83)
			M	27.73 (7.65)
			L	28.34 (6.59)
		女	H	28.21 (6.40)
			M	28.15 (7.34)
			L	29.18 (5.15)
	高	男	H	28.37 (5.54)
			M	28.07 (5.75)
			L	26.33 (7.62)
		女	H	29.13 (6.00)
			M	29.61 (5.88)
			L	28.59 (6.84)

注) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

Table 4-13 感情表出の制御, 学校段階, 性別の友人関係の満足感得点についての分散分析の結果

		友人関係の満足感		
第1因子	1次交互	表・制	2.17	
		学校段階差	1.74	
		性差	2.05	
		表・制×学校段階	.06	
		表・制×性	2.00	
		学校段階×性	3.20 †	高男<高女
2次交互		1.33		
第2因子	1次交互	表・制	27.57 ***	H<(L・M) M<L
		学校段階差	1.90	
		性差	1.04	
		表・制×学校段階	.28	
		表・制×性	.80	
		学校段階×性	3.58 †	高男<高女
2次交互		.21		
第3因子	1次交互	表・制	8.56 ***	
		学校段階差	.32	
		性差	4.47 *	
		表・制×学校段階	2.52 †	
		表・制×性	3.18 *	(男H・女H)<(女M・女L) (男L・男M・女M)<女L
		学校段階×性	5.83 *	高男<高女
2次交互		1.16		
第4因子	1次交互	表・制	4.03 *	(M・H)<L
		学校段階差	1.14	
		性差	2.61	
		表・制×学校段階	.96	
		表・制×性	.65	
		学校段階×性	3.67 †	高男<高女
2次交互		1.31		
第5因子	1次交互	表・制	.66	
		学校段階差	.07	
		性差	2.96	
		表・制×学校段階	2.03	
		表・制×性	.74	
		学校段階×性	2.17	
2次交互		.01		

注1) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

2) †p<.10, *p<.05, ***p<.001

御」と第4因子の「同調のための抑制的制御」について多重比較を行った結果、低群のほうが中群または高群より友人関係の満足感が高いことが示された。感情表出の制御と性の交互作用が見られた第3因子「自己抑圧的制御」について単純主効果の検定および多重比較を行った結果、高群は男女を問わず最も友人関係の満足感が低いこと、そして同じく低群であっても女子の低群が男子の低群よりも満足感が高いことが示された。

結果を因子別に見てみると、第2因子の「非仲間志向的制御」を多く行う人は友人関係の満足感が低く、少なく行う人がもっとも友人関係の満足感が高いという結果であった。第3因子の「自己抑圧的制御」を少なく行う女子は他の群より友人関係の満足感が高く、多く行う男子と女子は他の群と比べ、友人関係の満足感が低いという結果であった。さらに第4因子「同調のための抑制的制御」を少なく行う人が他の群の人より、友人関係の満足感が高いという結果となった。

全体的に考えると友達に感情をネガティブにばかり強く表わしたり、また、反対に自分の感情を抑制しすぎることは友人関係において満足感を得られないことが考えられる(Fig.4-5)。

研究5の要約

研究5では感情表出の制御と社会的適応感（友人関係の満足感）との関連について検討した。「非仲間志向的制御」，「自己抑圧的制御」，「同調のための抑制的制御」において感情表出の制御を多く行う生徒は、友人関係の満足感が低いことが明らかになった。これらの結果から、感情表出の制御を多く行うことは友人関係の満足感において望ましくないことが推測される。

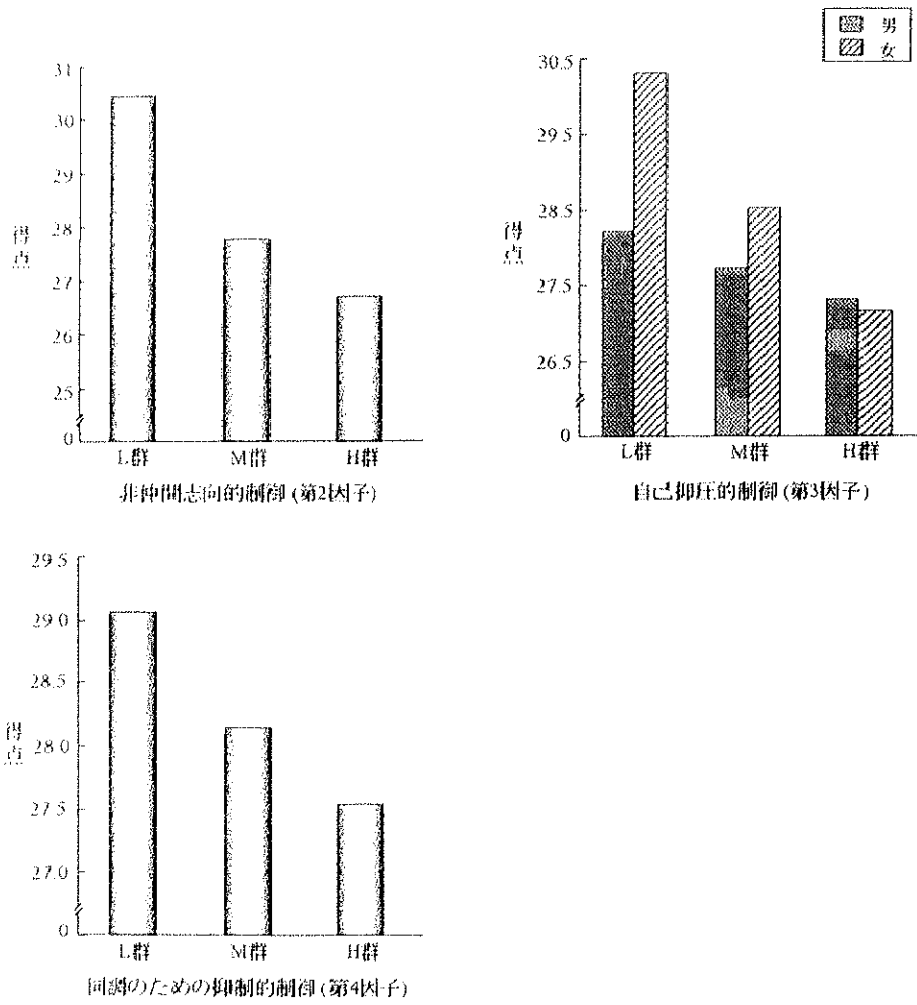


Figure 4-5 感情表出の制御の各群における友人関係の満足感の平均値

第3節 学校生活意識および問題行動念慮と感情表出の制御との関連

[研究6, 7]

1. 学校生活意識と感情表出の制御との関連 [研究6]

目的

学校について、文部省（1992）が「登校拒否はどの子にも起りうるもの」として認識するような社会状況であり、この登校拒否については文部省（1993）が不登校の児童・生徒を対象に調査を実施した結果、中学校では「学校生活の影響」がトップに上げられている。

中学生と高校生は一日のほとんどの時間を学校で過ごしており、学校生活は学校生活への適応度（授業・校則への適応，先生との関係など）と仲間との連帯が重要であると考え、この2つの観点から、どのような気持ちで学校生活をおくっているのかを検討することは、生徒の様々な適応を調べる上で重要な判断材料となる。

本研究では、どのような学校生活を送っている生徒がどのような感情表出の制御をどのくらい行っているのかを検討することによって、学校生活意識（学校適応・仲間志向）に焦点を合わせた感情表出の制御の態様について検討する。

方法

被調査者 東京都公立中学校2校 1年生 182名（男子152名，女子30名），2年生 350名（男子229名，女子121名），3年生 208名（男子164

名、女子44名)、東京都公立高等学校 5校1年生109名(男子47名、女子62名)、2年生156名(男子57名、女子99名)、3年生287名(男子154名、女子133名)。これらの高校の学力レベルは「中の上」と思われる。

調査内容

(a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。

(b) 学校生活意識尺度：久世・二宮・大野(1985)によって、学校に対してどのように思っているかを測定するために作成され、二宮・大野(1990)により信頼性が検証された。学校適応15項目、仲間志向11項目を使用している。5件法採用しており、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階に対し、5点～1点を与えた。

調査方法 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

最初、学校生活意識の類型化を行った。「学校適応-脱学校」と仲間志向-孤立志向」の2下位尺度得点はそのいずれもがほぼ正規分布を示したため(Fig.4-6, 4-7)、久世・二宮・大野(1985)を参考に「学校適応-脱学校」と「仲間志向-孤立志向」の2つの下位尺度の平均値(学校適応意識： $M=47.23$ (11.47)、仲間志向意識： $M=42.67$ (7.43))をもとにそれぞれH・L群をつくり、直交する座標軸を作成した。そこで、右上を適応型(学校適応かつ仲間志向)、左上を勉強型(学校適応かつ孤立志向)、左下を孤立型(脱学校かつ孤立志向)、右下を逸脱型(脱学校かつ仲間志向)にした(Fig.4-8)。学校生活意識の類型の区分得点は、適応型が学校適応意識得点48以上、仲間

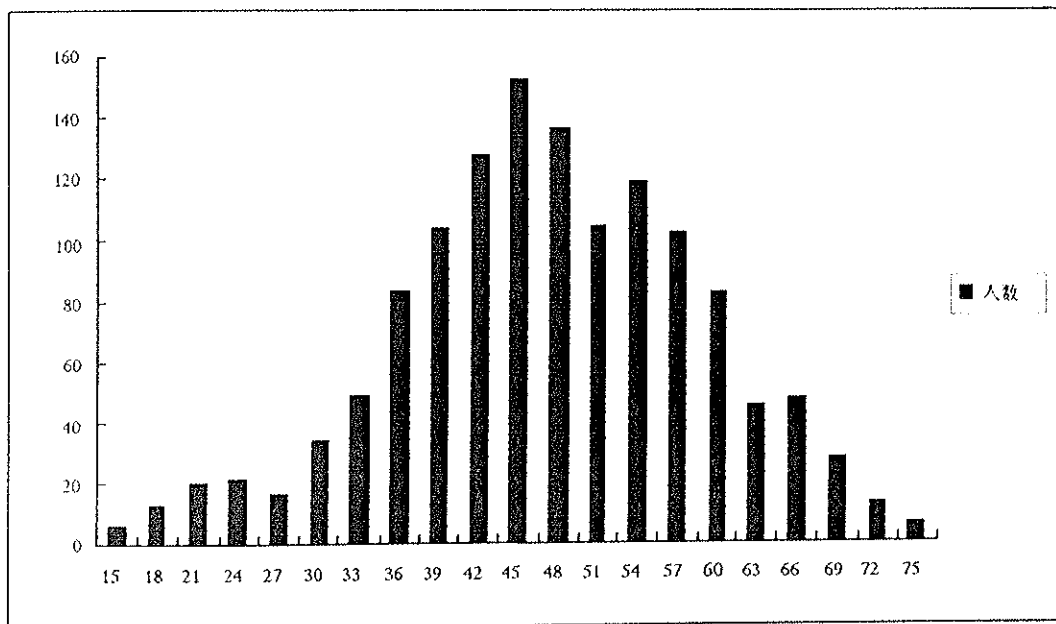


Figure4-6 学校適応意識得点の分布

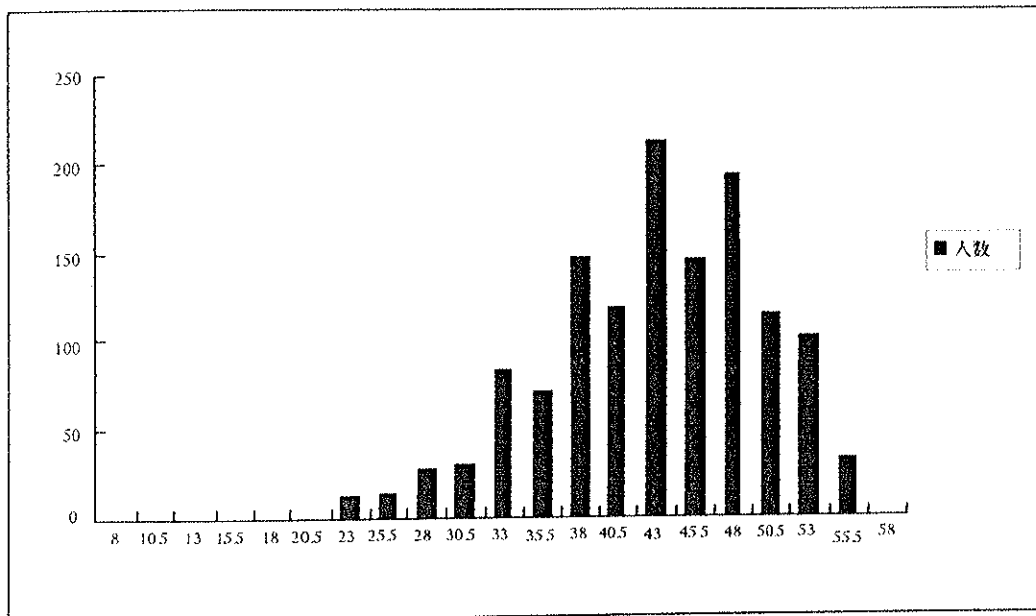


Figure4-7 仲間志向意識得点の分布

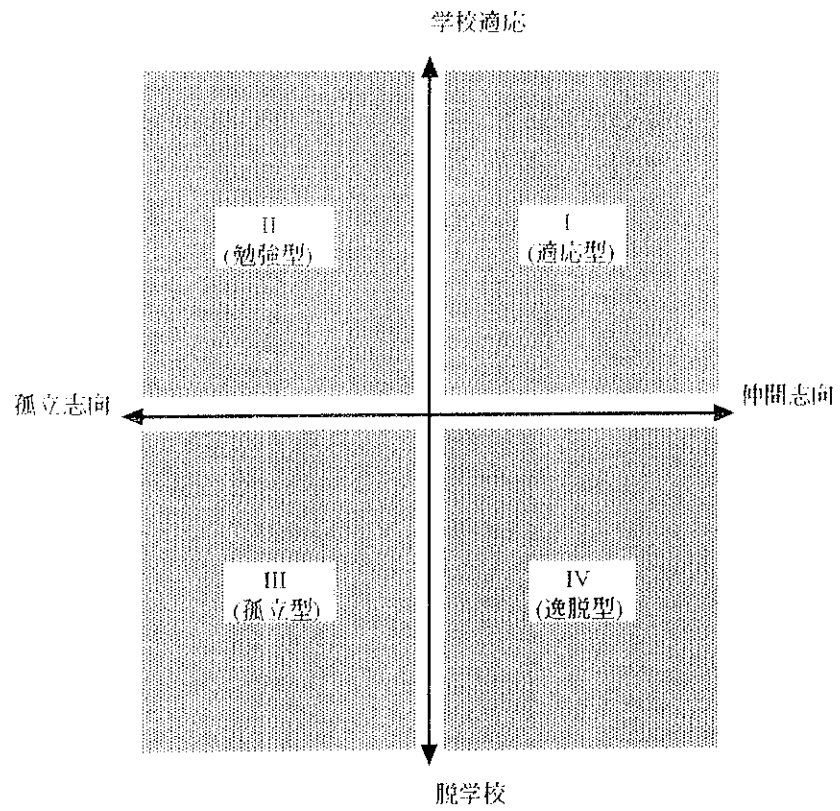


Figure 4-8 学校生活に対する意識の類型

注) 久世ほか (1985) より引用

志向意識得点 43 以上, 勉強型が学校適応意識得点 48 以上, 仲間志向意識得点 42 以下, 孤立型が学校適応意識得点 47 以下, 仲間志向意識得点 42 以下, 逸脱型が学校適応意識得点 47 以下, 仲間志向意識得点 43 以上である。なお, 各々の類型における学校段階・性別被調査者数は Table4-14 に示されている通りである。

学校生活意識と感情表出の制御との関連を検討するために学校生活意識類型 (4 類型) × 学校段階 (中学生・高校生) × 性 (男子・女子) の 3 要因分散分析を行った (Table4-15, 4-16)。なお, 本研究の多重比較には, すべて LSD 法が用いられた。

まず, 第 1 因子の「八方美人的制御」において学校生活意識類型と性の交互作用が有意傾向であった ($F(3,1195) = 2.40, p < .10$)。また, 学校段階と性の交互作用が有意傾向であった ($F(1,1195) = 3.21, p < .10$)。第 2 因子の「非仲間志向的制御」では学校生活意識類型と学校段階の交互作用 ($F(3,1195) = 2.80, p < .05$) および学校段階と性の交互作用 ($F(1,1195) = 4.58, p < .05$) が認められた。第 3 因子の「自己抑圧的制御」において性の主効果 ($F(1,1195) = 18.10, p < .001$) と学校段階の主効果 ($F(1,1195) = 34.08, p < .001$) が見られ, 第 4 因子の「同調のための抑制的制御」 ($F(3,1195) = 2.88, p < .05$) と第 5 因子の「同調のための強調的制御」 ($F(3,1195) = 4.97, p < .01$) において学校生活意識類型の主効果が認められた。

以上の結果の単純主効果の検定および多重比較の結果, 第 1 因子の「八方美人的制御」においては, 男子の孤立型が最も感情表出の制御を少なく行い, 女子の適応型や孤立型が男子の適応型や逸脱型よりこの制御を多く行うことが示された。第 2 因子の「非仲間志向的制御」においては勉強型と孤立型が適応型と逸脱型より感情表出の制御を多く行うことが明らかにされた。第 3 因子の「自己抑圧的制御」では学校段階差や性差が認められ, 高校生が中学

Table4-14 学校生活意識における学校段階・性別被調査者数

	中		高	
	男	女	男	女
適応型	203	58	46	96
勉強型	138	17	40	33
孤立型	116	42	101	74
逸脱型	73	70	69	95

Table4-15 感情表出の制御における学校生活意識類型別平均 (SD)

	中								高							
	男				女				男				女			
	適応型	勉強型	孤立型	逸脱型	適応型	勉強型	孤立型	逸脱型	適応型	勉強型	孤立型	逸脱型	適応型	勉強型	孤立型	逸脱型
第1因子	15.48 (5.05)	15.02 (4.70)	15.00 (4.90)	14.98 (5.79)	16.41 (5.01)	18.11 (4.67)	17.14 (4.48)	16.95 (3.96)	16.88 (4.00)	17.09 (4.68)	15.09 (4.72)	16.61 (5.05)	17.52 (3.97)	16.15 (4.50)	17.39 (4.72)	16.36 (4.28)
第2因子	8.77 (3.27)	11.00 (3.78)	11.38 (4.31)	10.40 (4.03)	7.94 (3.05)	10.70 (5.02)	9.80 (3.80)	9.57 (3.76)	9.37 (3.72)	11.84 (3.86)	11.41 (4.01)	9.35 (3.17)	7.85 (2.90)	8.36 (2.65)	9.28 (3.55)	7.88 (3.00)
第3因子	11.02 (3.92)	10.48 (4.07)	10.63 (3.90)	10.62 (3.90)	11.36 (4.07)	13.18 (3.63)	12.30 (5.35)	12.07 (4.18)	13.11 (3.99)	13.25 (3.62)	11.84 (3.76)	12.07 (4.42)	13.28 (3.57)	13.34 (4.30)	13.31 (4.15)	12.81 (4.31)
第4因子	9.85 (3.68)	10.22 (3.65)	10.20 (3.71)	9.69 (3.59)	9.32 (3.10)	10.58 (4.18)	9.68 (3.75)	9.94 (3.32)	10.38 (3.62)	11.19 (3.03)	9.92 (3.62)	9.83 (3.57)	9.54 (3.00)	10.51 (3.16)	10.04 (3.46)	9.30 (3.41)
第5因子	3.92 (1.95)	3.73 (1.69)	4.20 (2.15)	4.45 (2.21)	3.79 (1.63)	4.41 (1.80)	4.35 (2.33)	4.71 (2.16)	4.13 (2.20)	4.22 (2.29)	3.96 (2.12)	4.14 (1.92)	3.75 (1.62)	3.72 (1.37)	4.29 (1.85)	4.28 (1.99)

注1) 適応型：学校適応かつ仲間志向，勉強型：学校適応かつ孤立志向，孤立型：脱学校かつ孤立志向，逸脱型：脱学校かつ仲間志向
 2) 各因子は，実際は下位尺度であるが，便宜上このように表記する。第1因子「八方美人的制御」，第2因子「非仲間志向的制御」，第3因子「自己抑圧的制御」，第4因子「同調のための抑制的制御」，第5因子「同調のための強調的制御」。

Table 4-16 学校生活意識類型, 学校段階, 性別の感情表出の制御得点についての分散分析の結果

第1因子	1次交互	類型差	.70	
		学校段階差	4.45 *	
		性差	18.51	
		類型×学校段階	1.12	
		類型×性	2.40	男 孤立<女 (適応・勉強・孤立・逸脱) 男 勉強<女 (勉強・孤立・逸脱) 男 (適応・逸脱)<女 (適応・孤立)
		学校段階×性	3.21 †	中男<(高男・中女・高女)
		2次交互	1.70	
第2因子	1次交互	類型差	28.39 ***	
		学校段階差	1.18	
		性差	40.19 ***	
		類型×学校段階	2.80 *	{中適応・高(適応・逸脱)} < {中(勉強・孤立・逸脱) 高(勉強・孤立)} 中逸脱<中(勉強・孤立)
		類型×性	.99	
		学校段階×性	4.58 *	高女<(中男・中女・高男) 中女<(中男・高男)
		2次交互	.63	
第3因子	1次交互	類型差	.64	
		学校段階差	34.08 ***	中<高
		性差	18.10 ***	男<女
		類型×学校段階	1.32 †	
		類型×性	1.43 *	
		学校段階×性	1.42 *	
		2次交互	.87	
第4因子	1次交互	類型差	2.88 *	適応・逸脱<勉強
		学校段階差	.03	
		性差	.87	
		類型×学校段階	.68	
		類型×性	.51	
		学校段階×性	.14 †	
		2次交互	.86	
第5因子	1次交互	類型差	4.97 **	適応<孤立・逸脱, 勉強<逸脱
		学校段階差	2.01	
		性差	1.23	
		類型×学校段階	.60	
		類型×性	.79	
		学校段階×性	.01	
		2次交互	1.20	

注1) 適応型：学校適応かつ仲間志向, 勉強型：学校適応かつ孤立志向, 孤立型：脱学校かつ孤立志向,

逸脱型：脱学校かつ仲間志向

2) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

3) † p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

生より、女子が男子より感情表出の制御を多く行うという結果であった。第4因子の「同調のための抑制的制御」においては勉強型が適応型や逸脱型より感情表出の制御を多く行い、第5因子の「同調のための強調的制御」においては、逸脱型が適応型や勉強型より感情表出の制御を多く行うことが明らかにされた (Fig.4-9)。

学校生活意識の類型別に感情表出の制御との関連性を見てみると、適応型は「八方美人的制御」のようにポジティブ感情を積極的に表す制御を除いて他の群より感情表出の制御を少なく行うことが示された。勉強型は「非仲間志向的制御」や「同調のための抑制的制御」のように相手に対するポジティブ感情を抑制し、自己抑制的な同調を多く行うことが示された。孤立型は「非仲間志向的制御」において感情表出の制御を多く行っており、関係形成を半分あきらめたような形でネガティブにばかり接していることが考えられる。女子の孤立型の場合は相手にいい印象を与えたいという願望からとにかくポジティブにばかり接する「八方美人的制御」を多く行うか、またはネガティブにばかり接する「非仲間志向的制御」を多く行う両極端な形が存在するようと思われる。逸脱型は、友人の強いネガティブ感情に同調するために自分がそれほど感じていない怒りやイライラを強めて表す、「同調のための強調的制御」を多く行っており、学校的生活自体には適応的でないが、仲間との関係を重視している生徒に多く見られる制御であることが考えられる。

研究6の要約

研究6では学校生活意識類型と感情表出の制御との関連について検討した。その結果、適応型は「八方美人的制御」のようにポジティブ感情を積極的に表す制御を除いて他の群より感情表出の制御を少なく行うことが明らかにな

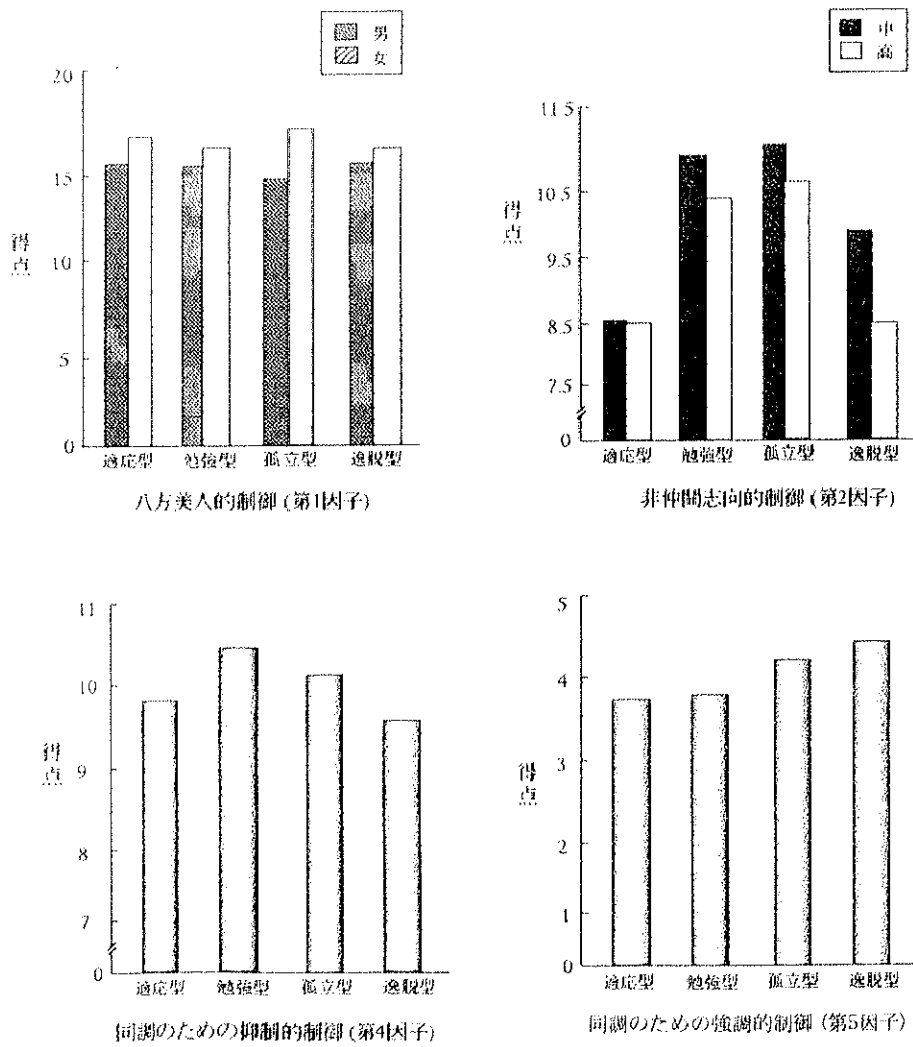


Figure 4-9 学校生活意識類型別における感情表出の制御の平均値

った。なお、勉強型と孤立型は「非仲間志向的制御」を多く行い、逸脱型は同調のための強制的制御を多く行うことが示された。

2. 感情表出の制御と問題行動念慮との関連 [研究7]

目的

最近、教育関連雑誌や新聞の見出しで「青少年の問題行動急増」、「暴力の心理」などが多く見られるようになり、親や教師や専門家など教育関係者は、青少年の問題行動に関する理解や対策に悩まされている。しかし、一言で問題行動と言っても、そのパターンは多様なものがあると思われる。ここでは問題行動を大きく3つに分類して考えて見る。

問題行動の1つのパターンとして、まず「キレ」が考えられる。「子どもの問題行動パターンが変わった」とか「子どもの新しい荒れ」という言葉の背景には、最近よく耳にする「キレた」という問題行動の特徴が影響しているように思われる。すなわち、以前はいわゆる不良と呼ばれる、いつも普段トラブルを起こしているような子が問題行動を起こすと思われていたのが、最近の問題行動の特徴は「ごくまじめな普通の子」が急に問題行動を起こすということで戸惑いを感じているのが事実である。本章の1節で述べたように、キレるというのは「他人に気付かれまいと抑えられた感情が存在し、抑えのたかが何かの拍子にはずれてしまうと、ふだんは決して見られないその感情が行動を伴って突然に現われること」であり、たとえ行動として「だれかへの暴力」が現われたとしても、それは前もって意識されていたことではない可能性が高い。

次に、例を挙げて説明すると、友人関係のトラブルでむしゃくしゃしたあ

る子どもが、付近にだれもいないことを見極めて、しかも自分もけがをしないように洋服を袖で手を包んで、用意周到に窓を割ったというような問題行動もあるが、この場合はキレとはその行動の様相が大分違うようである。

最後に、いわゆる不良と言われる子たちが、教師や親に反発して暴力を振るったり、麻薬やシンナーなどをやったりするようなパターンがある。

上述した、問題行動の3つのパターンの中で、「キレル」行動に至る前の段階として「キレ衝動」と感情表出の制御との関連について、本章の第2節で検討した結果、「八方美人的制御」、「非仲間志向的制御」、「同調のための強制的制御」を多く行う人は「キレ衝動」が高いことが示された。友人関係において演技して自分の感情を過剰に表わしたり、ネガティブにばかり表すことが「キレ」と関連することが示された。

ところが、感情表出の制御を多く行う人が、「キレ衝動」のように「もうこれ以上我慢できないと思うことが多い」とか「カッとなって自分を見失いそうなことが多い」といったように、感覚として「キレルだろう」「キレそうだ」と思うことはあるが、具体的に「先生をなぐりたい」とか「薬物をやってみよう」といったような問題行動までを意識しているのだろうか。

中学・高校生の暴力や問題行動についてのさまざまな観点からの報告が見られるが、本研究では、感情表出の制御の観点から問題行動念慮をとらえるよう試みる。

方法

被調査者 東京都公立中学校 2校 1年生 182名（男子 152名，女子 30名），2年生 350名（男子 229名，女子 121名），3年生 208名（男子 164名，女子 44名），東京都公立高等学校 5校 1年生 109名（男子 47名，女

子62名), 2年生156名(男子57名, 女子99名), 3年生287名(男子154名, 女子133名)。これらの高校の学力レベルは「中の上」と思われる。

調査内容

(a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。

(b) 問題行動念慮：東京都生活文化局(1982)が行った「大都市高校生の性をめぐる意識と行動」の調査の中で使われた項目に基づき、問題行動念慮を表す6項目を選定、使用した。6項目とは、家出、中退、死、先生への暴力、親への暴力、および薬物であった。各項目に対し、どれくらいそう思うことがあるかを4件法で評定した。「しばしばある」から「ない」までの4段階に対し、4点~1点を与えた。

調査方法 各学級でHRの時間または授業時間に一齋に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

まず、感情表出の制御の各下位尺度得点の上位30%、中位30%、下位30%をそれぞれ高群(H)・中群(M)・低群(L)の3群にわけた。残りの10%は分析に使用されていない。

なお、各々の因子における感情表出の制御・学校段階・性別被験者数はTable4-17に示されている通りである。

それぞれの因子における高・中・低群の各項目の合計による区分得点は、第1因子(高群19以上, 中群18未満14以上, 低群14未満), 第2因子(高群12以上, 中群11未満8以上, 低群7未満), 第3因子(高群14以上, 中群14未満10以上, 低群10未満), 第4因子(高群12以上, 中群11未満8

Table4-17 問題行動における感情表出の制御・学校段階・性別被調査者数

	中						高					
	男			女			男			女		
	H	M	L	H	M	L	H	M	L	H	M	L
第1因子	149	163	192	69	60	45	95	75	77	107	99	65
第2因子	195	165	115	49	57	60	103	77	38	45	92	108
第3因子	135	203	214	65	73	55	101	96	64	153	83	62
第4因子	190	191	122	61	72	54	102	81	55	79	122	68
第5因子	175	64	179	71	22	48	82	26	85	92	37	76

注) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

以上、低群8未満)、第5因子(高群5以上、中群4未満3以上、低群3未満)である。

次に、感情表出の制御と問題行動念慮との関連を検討するために、感情表出の制御(高・中・低)×学校段階(中学生・高校生)×性の3要因分散分析を行った(Table4-18, 4-19)。なお、本研究の多重比較には、すべてLSD法が用いられた。

分析の結果、「家出」では、「八方美人的制御」($F(1,1185)=3.49, p<.10$)、「非仲間志向的制御」($F(1,1189)=6.59, p<.05$)、「自己抑圧的制御」($F(1,1292)=3.76, p<.10$)、「同調のための抑制的制御」($F(1,1051)=3.66, p<.10$)において、学校段階と性の交互作用が見られ、第5因子の「同調のための強調的制御」において2次の交互作用($F(2,1074)=2.78, p<.10$)が有意傾向であった。

まず、学校段階と性の交互作用が見られたところに対し単純主効果の検定を行った結果、男子中学生より女子中学生の方が家出について考えることが多いという結果であった。2次の交互作用が見られた「同調のための強調的制御」において、学校段階別に感情表出の制御と性の単純交互作用の分析をした。中学生においては性の主効果($F(1,554)=4.26, p<.05$)のみが有意で、高校生においては感情表出の制御と性の交互作用が($F(2,391)=2.74, p<.10$)が有意傾向であった。そこで、単純主効果の検定および多重比較を行った結果、中学生においては女子が男子より家出について考えることが多いこと、そして、高校生においては男子の「同調のための強調的制御」の低群と女子の「同調のための強調的制御」の高群が女子の「同調のための強調的制御」の中群より、家出について考えることが多いという結果となった(Fig.4-10)。

「学校の中退」では、すべての因子において学校段階と性の交互作用が認められた。また、第2因子の「非仲間志向的制御」においては感情表出の制

Table 4-18 問題行動念慮における感情表出の制御の各群の平均(SD)

			家出	中退	死	先生への暴力	親への暴力	薬物	
第1因子	中	II	1.75 (.101)	1.48 (.86)	1.36 (.76)	1.85 (1.09)	1.93 (1.06)	1.08 (.41)	
		男	M	1.67 (.94)	1.60 (.95)	1.35 (.78)	1.84 (1.09)	1.78 (1.01)	1.14 (.58)
		L	1.74 (1.07)	1.68 (1.07)	1.39 (.79)	1.97 (1.25)	1.95 (1.19)	1.15 (.58)	
		女	II	1.92 (1.09)	1.98 (1.13)	1.87 (1.08)	2.04 (1.16)	1.74 (1.00)	1.07 (.35)
		M	2.00 (1.02)	2.05 (.99)	1.78 (1.01)	1.98 (1.06)	1.83 (1.10)	1.05 (.28)	
		L	1.88 (.98)	1.80 (1.12)	1.53 (.91)	1.86 (1.14)	1.57 (.94)	1.04 (.29)	
	高	II	1.87 (.99)	1.81 (1.02)	1.57 (.96)	1.87 (1.05)	1.82 (1.04)	1.13 (.47)	
		男	M	1.90 (1.14)	1.76 (1.01)	1.66 (1.00)	1.88 (1.05)	1.69 (.91)	1.25 (.65)
		L	1.83 (1.13)	1.80 (1.11)	1.50 (.87)	2.05 (1.16)	1.70 (1.01)	1.11 (.48)	
		II	1.97 (1.00)	1.60 (.88)	1.54 (.82)	1.47 (.89)	1.57 (.91)	1.04 (.25)	
		女	M	1.85 (.96)	1.65 (.98)	1.29 (.60)	1.37 (.67)	1.37 (.73)	1.06 (.27)
		L	1.70 (.93)	1.49 (.85)	1.35 (.79)	1.58 (.95)	1.50 (.81)	1.09 (.52)	
第2因子	中	II	1.82 (1.07)	1.73 (1.05)	1.44 (.80)	2.02 (1.20)	1.91 (1.10)	1.17 (.63)	
		男	M	1.68 (.92)	1.50 (.90)	1.30 (.69)	1.68 (.98)	1.85 (1.03)	1.03 (.17)
		L	1.74 (1.10)	1.71 (1.11)	1.40 (.88)	2.04 (1.30)	1.96 (1.16)	1.22 (.72)	
		II	2.10 (1.01)	2.22 (1.15)	1.94 (1.16)	2.14 (1.06)	1.74 (.96)	1.10 (.41)	
		女	M	1.98 (1.14)	2.15 (1.17)	1.68 (1.00)	1.91 (1.18)	1.77 (1.05)	1.03 (.26)
		L	1.85 (1.00)	1.80 (1.00)	1.65 (.93)	2.03 (1.19)	1.77 (1.11)	1.01 (.12)	
	高	II	1.81 (.95)	1.83 (1.06)	1.70 (1.07)	2.02 (1.12)	1.73 (.96)	1.28 (.71)	
		男	M	1.96 (1.17)	1.88 (1.07)	1.48 (.78)	1.81 (.98)	1.67 (.96)	1.11 (.45)
		L	2.00 (1.13)	1.81 (1.00)	1.39 (.82)	2.21 (1.09)	2.23 (1.14)	1.13 (.41)	
		II	1.73 (1.03)	1.95 (1.14)	1.66 (.97)	1.57 (.96)	1.42 (.83)	1.06 (.33)	
		女	M	1.76 (.78)	1.42 (.66)	1.29 (.56)	1.41 (.72)	1.43 (.71)	1.02 (.14)
		L	1.93 (1.04)	1.54 (.90)	1.39 (.72)	1.48 (.89)	1.51 (.90)	1.09 (.42)	
第3因子	中	II	1.67 (.96)	1.43 (.85)	1.31 (.74)	1.76 (1.09)	1.91 (1.14)	1.10 (.47)	
		男	M	1.66 (.98)	1.63 (1.00)	1.31 (.70)	1.90 (1.10)	1.80 (1.04)	1.10 (.47)
		L	1.85 (1.06)	1.68 (1.04)	1.45 (.85)	2.01 (1.24)	1.98 (1.11)	1.16 (.61)	
		II	1.93 (1.07)	1.95 (1.11)	1.80 (.97)	1.96 (1.11)	1.84 (1.10)	1.04 (.27)	
		女	M	2.05 (1.00)	2.20 (1.11)	1.78 (1.12)	2.18 (1.14)	1.75 (.99)	1.06 (.34)
		L	1.83 (1.04)	1.85 (1.11)	1.60 (.93)	1.90 (1.14)	1.63 (1.04)	1.03 (.26)	
	高	II	1.75 (1.01)	1.82 (1.05)	1.48 (.87)	1.82 (1.01)	1.66 (.93)	1.15 (.59)	
		男	M	1.95 (1.11)	1.71 (1.02)	1.68 (1.04)	1.93 (1.13)	1.86 (1.07)	1.20 (.54)
		L	1.95 (1.11)	1.95 (1.09)	1.48 (.81)	2.17 (1.13)	1.65 (.91)	1.14 (.53)	
		II	1.85 (1.00)	1.59 (.89)	1.47 (.84)	1.45 (.86)	1.45 (.82)	1.08 (.39)	
		女	M	1.80 (.96)	1.55 (.90)	1.39 (.74)	1.43 (.84)	1.58 (.95)	1.05 (.35)
		L	2.00 (.99)	1.82 (1.04)	1.40 (.66)	1.62 (.92)	1.50 (.74)	1.08 (.41)	
第4因子	中	II	1.69 (.97)	1.57 (.96)	1.38 (.79)	1.91 (1.14)	1.85 (1.11)	1.12 (.49)	
		男	M	1.85 (1.07)	1.63 (.96)	1.35 (.74)	1.95 (1.16)	1.98 (1.07)	1.15 (.60)
		L	1.60 (.96)	1.58 (1.04)	1.31 (.73)	1.93 (1.23)	1.89 (1.13)	1.08 (.43)	
		II	1.88 (1.01)	2.01 (1.13)	1.75 (1.05)	2.11 (1.14)	1.72 (1.12)	1.06 (.35)	
		女	M	2.00 (1.05)	1.90 (1.06)	1.72 (1.04)	2.01 (1.08)	1.73 (.96)	1.05 (.32)
		L	1.90 (1.01)	2.14 (1.21)	1.72 (.99)	1.98 (1.23)	1.79 (1.05)	1.01 (.13)	
	高	II	1.79 (.99)	1.81 (1.06)	1.53 (.95)	1.73 (.99)	1.67 (.91)	1.12 (.45)	
		男	M	1.91 (1.13)	1.61 (.94)	1.45 (.85)	1.96 (1.13)	1.72 (1.01)	1.17 (.58)
		L	2.07 (1.13)	2.16 (1.18)	1.78 (1.08)	2.27 (1.12)	1.92 (1.05)	1.23 (.63)	
		II	1.73 (.98)	1.63 (.98)	1.55 (.88)	1.44 (.82)	1.40 (.79)	1.08 (.42)	
		女	M	1.94 (1.01)	1.60 (.90)	1.42 (.79)	1.54 (.90)	1.59 (.92)	1.08 (.38)
		L	1.95 (.99)	1.69 (.98)	1.32 (.58)	1.50 (.93)	1.52 (.88)	1.07 (.43)	
第5因子	中	II	1.89 (1.05)	1.70 (1.00)	1.39 (.76)	2.03 (1.18)	2.02 (1.11)	1.15 (.58)	
		男	M	1.64 (.84)	1.51 (.85)	1.43 (.81)	1.79 (1.07)	1.76 (1.00)	1.07 (.41)
		L	1.68 (1.06)	1.65 (1.10)	1.34 (.80)	1.97 (1.23)	1.98 (1.18)	1.14 (.58)	
		II	2.04 (1.01)	2.23 (1.17)	1.84 (1.10)	2.27 (1.16)	1.72 (.96)	1.09 (.41)	
		女	M	2.13 (1.08)	2.00 (1.06)	1.68 (.99)	2.00 (1.11)	1.81 (1.09)	1.00 (.00)
		L	1.83 (1.07)	2.10 (1.11)	1.79 (1.07)	2.12 (1.28)	1.80 (1.17)	1.02 (.14)	
	高	II	1.79 (1.00)	1.81 (1.03)	1.60 (.97)	1.95 (1.11)	1.62 (.94)	1.20 (.56)	
		男	M	1.92 (1.16)	1.84 (1.08)	1.53 (.90)	1.84 (1.00)	1.65 (.97)	1.15 (.46)
		L	2.00 (1.14)	1.78 (1.08)	1.52 (.90)	2.02 (1.13)	1.80 (.99)	1.16 (.55)	
		II	2.04 (1.09)	1.82 (1.02)	1.58 (.82)	1.59 (.97)	1.68 (1.02)	1.11 (.46)	
		女	M	1.59 (.83)	1.45 (.76)	1.27 (.50)	1.24 (.64)	1.21 (.47)	1.02 (.16)
		L	1.77 (.96)	1.60 (.93)	1.44 (.87)	1.46 (.87)	1.47 (.79)	1.10 (.50)	

注) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強制的制御」。

表4-19 感情表出の制御、学校段階、性別の問題行動念慮得点についての分散分析の結果

		家出	中退	死	先生への暴力	親への暴力	薬物
1 非仲間志向的制御	表・制	.58	.22	1.42	1.18	1.64	.83
	学校段階差	.90	.10	.03	6.75 **	9.40 ** 高<中	.80
	性差	2.40	1.77	2.81	7.96 **	11.19 ** 女<男	8.52 ** 女<男
	表・制・学校段階	.25	.34	.05	.51	.30	.62
	表・制・性	.32	1.64	1.87	.47	.42	.88
	学校段階×性	3.49 † 中男<中女	21.36 * (中男・高女)<(中男・高女) 高男<中女	26.39 *** 中男<(中女・高男) (高男・高女)<中女	15.72 ** 高女<(中男・中女・高男)	.54	.45
	2次交互	.64	.37	1.81	.32	1.48	.84
	表・制	.26	4.22 *	7.47 ** (L・M)<H	6.74 ** M<(L・H)	1.68	6.87 ** M<(L・H)
	学校段階差	.29	.98	.09	5.78 * 高男<中女	7.78 ***	2.05
	性差	1.26	2.79	5.90 *	6.61 *	14.03 ***	10.96 ** 女<男
2 自己抑圧的制御	表・制・学校段階	2.20	.16	.66	.20	1.53	.29
	表・制・性	.14	2.89 † (高L・高H・男L・男M・男H)<(女H)	.38	1.20	1.28	1.00
	学校段階×性	6.59 * 中男<中女	22.93 *** (中男・高女)<(中男・高女) 高男<中女	15.24 *** 中男<(中女・高男) (高男・高女)<中女	18.56 *** 高女<(中男・中女・高男)	3.75 † 高女<(中女・中男・高男) 高男<中男	.26
	2次交互	.45	3.43 *	.74	.12	.88	2.11
	表・制	1.69	2.14	.08	3.18 * H<(L・M)	.10	.27
	学校段階差	1.42	.00	.00	6.53 * 中男<中女	10.68 ** 高<中	1.98
	性差	1.55	5.14 *	5.64 *	5.48 *	9.70 ** 女<男	8.55 ** 女<男
	表・制・学校段階	.26	3.29 * 中H<高L	.82	1.22	2.10	.42
	表・制・性	.77	.96	1.64	1.33	.39	.15
	学校段階×性	3.76 † 中男<中女	25.92 *** (中男・高女)<(高男・中女) 高男<中女	24.13 *** 中男<(中女・高男) (高男・高女)<中女	21.39 *** 高女<(中男・中女・高男)	.47	.24
3 八方美人的制御	2次交互	1.89	1.17	1.78	.46	.95	.80
	表・制	2.22	1.75	.81	.76	1.42	.45
	学校段階差	1.71	.03	.03	9.68 **	8.97 ** 高<中	1.96
	性差	1.80	3.82	6.33 *	5.94 *	10.41 ** 女<男	7.57 ** 女<男
	表・制・学校段階	2.04	1.45	.58	2.61 † (高M・高H)<(中L・中M・中H)	.40	.97
	表・制・性	.04	.05	1.17	1.44	.82	.37
	学校段階×性	3.66 † 中男<中女	22.18 *** (中男・高女)<(高男・中女) 高男<中女	21.50 *** 中男<(中女・高男) (高男・高女)<中女	17.54 *** 高女<(中男・中女・高男)	.41	.05
	2次交互	.49	3.05 * 中男<中女 高M<L・女<男	2.14	.69	.91	.36
	表・制	2.48	2.68	1.21	3.00	2.22	1.40
	学校段階差	.38	1.47	.01	12.18 **	12.78 ***	1.59
4 同調のための抑制的制御	性差	1.43	7.18 **	7.10 **	2.84	6.83 **	5.54 * 女<男
	表・制・学校段階	1.30	.07	.33	.14	.09 **	.00
	表・制・性	.92	.61	.71	.32	.27	.05
	学校段階×性	2.33	18.50 *** (中男・高女)<(中女・高男) 高男<中女	15.78 *** 中男<(中女・高男) (高男・高女)<中女	18.03 *** 高女<(中男・中女・高男)	.04	.00
	2次交互	2.78 † 中男<中女 高M<(男L・女H)	.34	.05	.18	2.44 † 中女<中男 高M<(男L・男H・女H) 女L<男L	.24

各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強制的制御」。

† p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

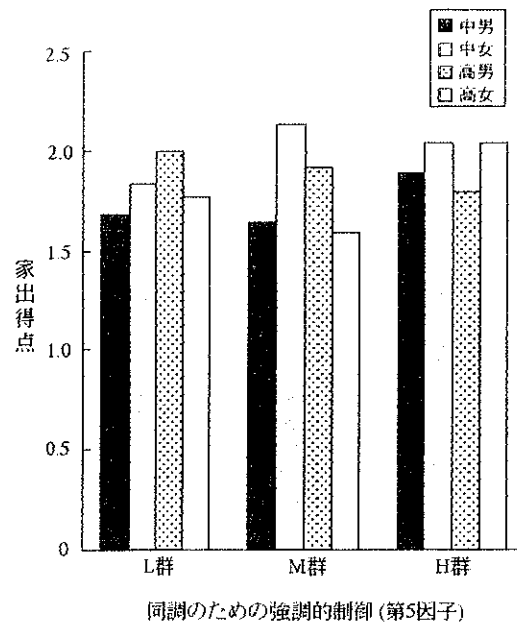


Figure 4-10 感情表出の制御の各群における問題行動念慮(家出)の平均値

御と性の交互作用に有意傾向が見られ ($F(2,1189)=2.89, p<.10$) , 第3因子の「自己抑圧的制御」においては感情表出の制御と学校段階の交互作用が見られた ($F(2,1292)=3.29, p<.05$) 。第4因子の「同調のための抑制的制御」においては2次の交互作用が認められた ($F(2,1051)=3.05, p<.05$) 。

まず、学校段階と性の交互作用が見られたところに対し、単純主効果の検定を行った結果、男子高校生や女子中学生が男子中学生と女子高校生より学校をやめたいと思うことが多く、特に女子中学生が中退について考えることが多かった。「非仲間志向的制御」と「自己抑圧的制御」において、単純主効果の検定および多重比較を行った結果、「非仲間志向的制御」の女子高群が他の群と比べ学校をやめたいと思うことが多いという結果であった。「自己抑圧的制御」においては、高校生の低群が中学生の高群より学校をやめたいと思うことが多いという結果であった。2次の交互作用が見られた「同調のための抑制的制御」において、学校段階別に感情表出の制御と性の単純交互作用の分析を行った。その結果、中学生においては性の主効果 ($F(1,685)=21.96, p<.001$) のみが有意で、高校生においては感情表出の制御 ($F(2,502)=4.02, p<.05$) と性 ($F(1,502)=4.19, p<.05$) の主効果が認められた。そこで、単純主効果の検定および多重比較を行った結果、中学生は女子が男子より中退をしたいと思うことが多く、高校生は男子が女子より、そして、「自己抑圧的制御」の低群が中群より学校をやめたいと思うことが多かった (Fig.4-11) 。

次に、「死」では、すべての因子において学校段階と性の交互作用が認められた。第2因子「非仲間志向的制御」で感情表出の制御の主効果 ($F(2,1189)=7.47, p<.01$) が認められた。

学校段階と性の交互作用が見られたところに対し、単純主効果の検定を行った結果、男子中学生が「死にたい」と思うことが最も少なく、女子中学生

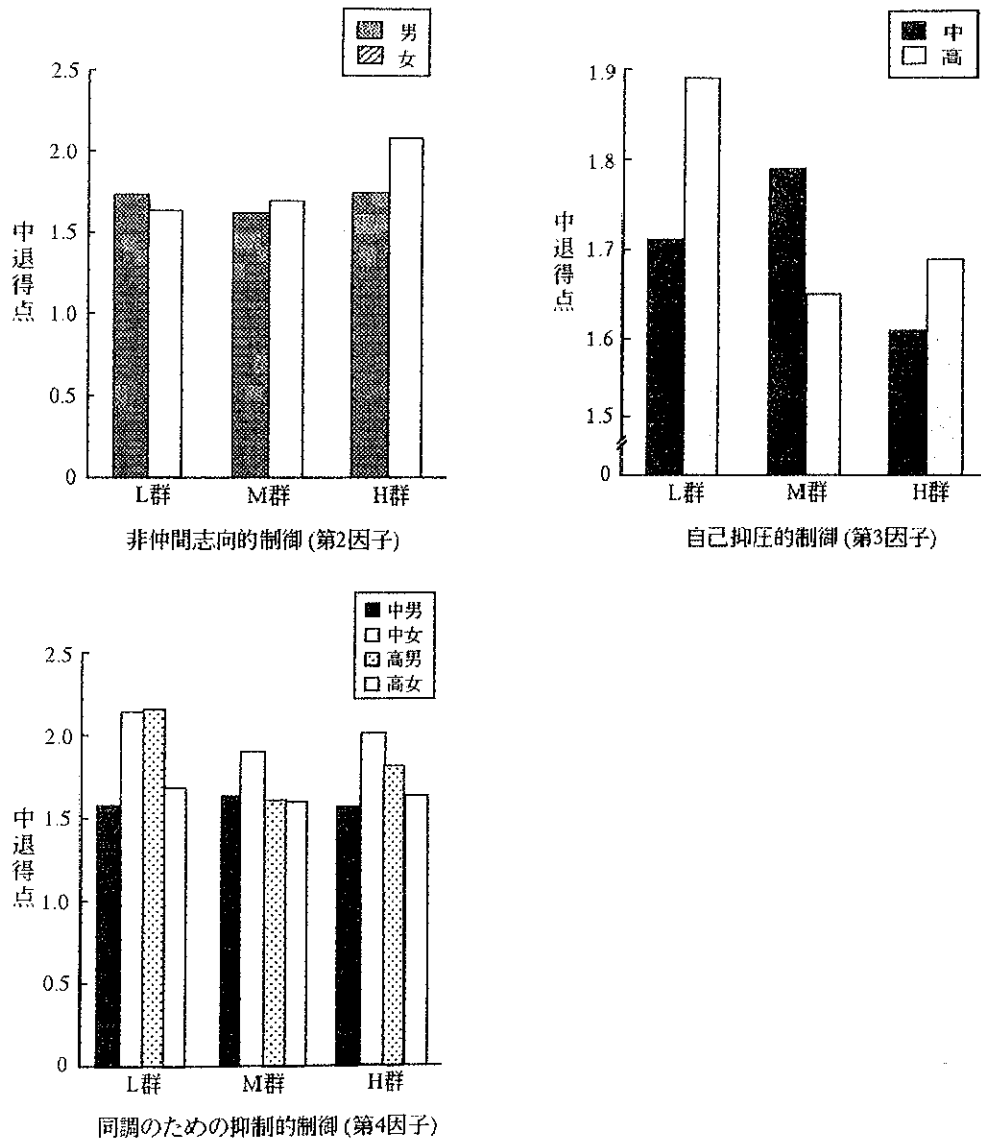


Figure 4-11 感情表出の制御の各群における問題行動念慮(中退)の平均値

が男子中学生や男子・女子高校生より「死にたい」と思うことが多いことが示された。感情表出の制御の主効果が見られた「非仲間志向的制御」に対し多重比較を行った結果、「非仲間志向的制御」を多く行う生徒が中程度や少なく行う生徒より「死にたい」と思うことが多かった (Fig.4-12)。

「先生への暴力」で、すべての因子において学校段階と性の交互作用が認められた。第2因子の「非仲間志向的制御」 ($F(2,1189)=6.74, p<.01$) および第3因子の「自己抑圧的制御」 ($F(2,1292)=3.18, p<.05$) において感情表出の制御の主効果が認められ、第4因子の「同調のための抑制的制御」において感情表出の制御と学校段階の交互作用に有意傾向 ($F(2,1051)=2.61, p<.10$) が見られた。

まず、学校段階と性の交互作用が見られたところに対し、単純主効果の検定を行った結果、男子・女子中学生や男子高校生の方が女子高校生より「先生をなぐりたい」と思うことが多いことが明らかにされた。「非仲間志向的制御」と「自己抑圧的制御」における多重比較を行った結果、「非仲間志向的制御」の低群と高群が中群より「先生をなぐりたい」と思うことが多かった。また「自己抑圧的制御」の低群と中群が高群より「先生をなぐりたい」と思うことが多いという結果となった。「同調のための抑制的制御」において単純主効果の検定と多重比較を行った結果、中学生の低群・中群・高群が高校生の中群と高群より「先生をなぐりたい」と思うことが多いという結果となった (Fig.4-13)。

「親への暴力」では、第1因子「八方美入的制御」(学校段階: ($F(1,1185)=9.40, p<.01$), 性: ($F(1,1185)=11.19, p<.01$), 第3因子「自己抑圧的制御」(学校段階: ($F(1,1292)=10.68, p<.001$), 性: ($F(1,1292)=9.70, p<.01$), 第4因子「同調のための抑制的制御」(学校段階: ($F(1,1051)=8.97, p<.01$), 性: ($F(1,1051)=10.41, p<.01$)) において学校段階および性の主効果が認

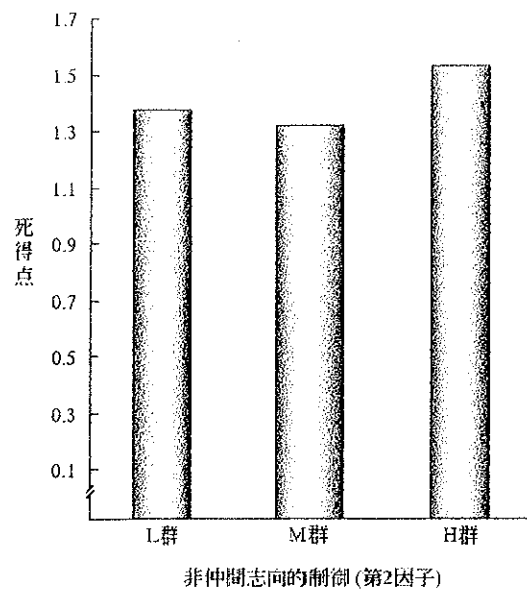


Figure 4-12 感情表出の制御の各群における問題行動念慮(死)の平均値

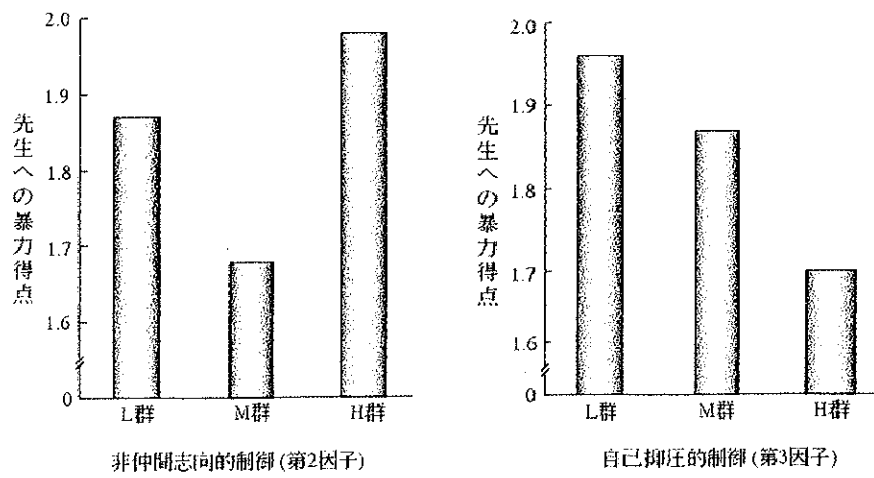


Figure 4-13 感情表出の制御の各群における問題行動念慮(先生への暴力)の平均値

められ、第2因子「非仲間志向的制御」 ($F(1,1189)=3.75, p<.10$) において学校段階と性の交互作用に有意傾向見られた。第5因子「同調のための強調的制御」 ($F(1,1074)=2.44, p<.10$) において2次の交互作用に有意傾向が認められた。

まず、学校段階および性の主効果が見られた「八方美人的制御」, 「自己抑圧的制御」, 「同調のための抑制的制御」においては、中学生が高校生より、そして男子が女子より「親をなぐりたい」と思うことが多いという結果となった。次に、学校段階と性の交互作用が見られたところに対し、単純主効果の検定を行った結果、女子高校生が「親をなぐりたい」と思うことが最も少なく、男子中学生が最も多いという結果であった。すなわち、「親をなぐりたい」と思うことは、中学生と男子の方が、高校生と女子の方より多いということが言える。

2次の交互作用が見られた「同調のための抑制的制御」において、学校段階別に感情表出の制御と性の単純交互作用の分析を行った。その結果、中学生においては性の主効果 ($F(1,554)=3.49, p<.10$) のみが有意傾向で、高校生においては感情表出の制御と性の交互作用 ($F(1,391)=2.52, p<.10$) に有意傾向が見られた。そこで、単純主効果の検定および多重比較を行った結果、中学生においては男子が女子より「親をなぐりたい」と思うことが多く、高校生においては「同調のための強調的制御」の女子の中群が最も「親をなぐりたい」と思うことが少なく、男子の低群が最も多かった (Fig.4-14)。

最後に「薬物」では、すべての因子において性の主効果が認められた。また、第2因子「非仲間志向的制御」において感情表出の制御の主効果が認められた ($F(1,1189)=6.87, p<.01$)。まず、性差については男子が女子より「シンナーや覚醒剤を吸いたい」と思うことが多いという結果となった。感情表出の制御の主効果が見られた「非仲間志向的制御」においては、多重比較の

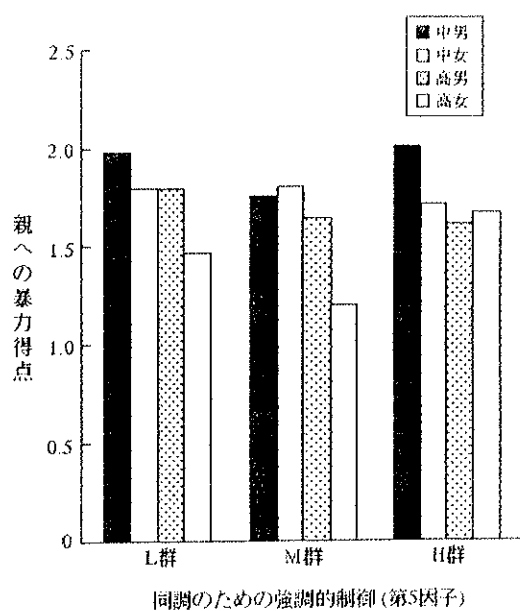


Figure 4-14 感情表出の制御の各群における問題行動念慮(親への暴力)の平均値

結果、「非仲間志向的制御」の低群や高群が中群より「シンナーや覚醒剤を吸いたい」と思うことが多いことが示された (Fig.4-15)。

結果を因子別に見てみると、第2因子の「非仲間志向的制御」を多く行う生徒は「死にたい」と思うことが多く (Fig.4-12)、中間くらいに行う生徒は「先生をなぐりたい」 (Fig.4-13)と「シンナーや覚醒剤をやってみたい」 (Fig.4-15)と思うことが少ないという結果であった。ここで、低群も高群とともに先生への暴力や薬物をやってみたいと思うことは、研究6-1で見たようにこの感情表出の制御を少なく行う生徒には逸脱群のように脱学校の生徒が含まれていると思われ、このことと関連して学校や先生に対する反抗心と薬物への好奇心を持つに至っている可能性が考えられる。第3因子の「自己抑圧的制御」を少なく行う高校生の方が多く行う中学生より「学校をやめたい (中退)」 (Fig.4-11)と思うことが多く、この感情表出の制御を中間くらいに行う生徒がそうでない生徒より「先生をなぐりたい」 (Fig.4-13)と思うことが少ないという結果であった。第4因子の「同調のための抑制的制御」では、中学生のすべての群がこの感情表出の制御を中間くらいに行う高校生や多く行う高校生より「先生をなぐりたい」と思うことが多いという結果であった。

第5因子の「同調のための強調的制御」では、高校生の場合、他の群と比べて男子の低群が「家出」 (Fig.4-11)と「親をなぐりたい」 (Fig.4-14)と思うことが多く、女子の高群は「家出」 (Fig.4-11)について思うことが多いという結果となった。「同調のための強調的制御」は研究4-2でも述べたように、男子の場合は本当の感情でないにしても友人と怒りなどの感情を共有することで仲間意識を固めていくのではないかと推察される。そこで、学校で仲間とうまくやっていけなくなった時、そのやるせなさが家の方向にむけられるのではないかとと思われる。

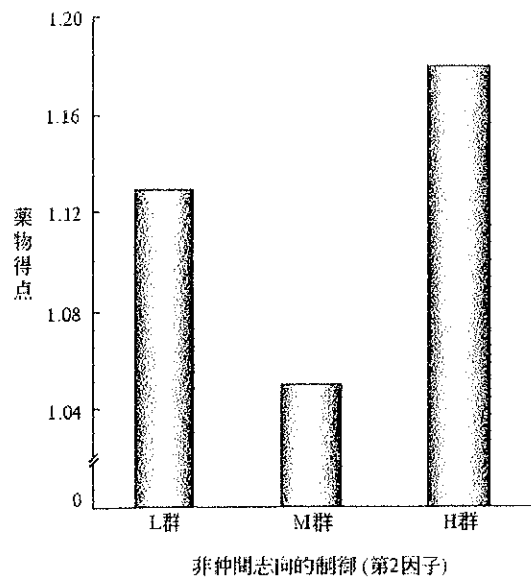


Figure 4-15 感情表出の制御の各群における問題行動念慮(薬物)の平均値

研究7の要約

研究7では、感情表出の制御と問題行動念慮（家出、中退、自殺、先生への暴力、親への暴力、薬物）との関連を検討した結果、「非仲間志向的制御」、
「自己抑圧的制御」、「同調のための強調的制御」が問題行動念慮において意味のある感情表出の制御の側面であった。関係性においては、下位尺度の性格ごとに異なる結果が得られたが、問題行動念慮には、感情表出の制御を多く行うことによるフラストレーションより、性格的な攻撃性がより密接に関連していることが推測される。感情表出の制御を多く行う生徒の問題行動傾向は、例え暴力的な行動がみられても、その問題行動の内容はおとなしく目立たない真面目な子が何かをきっかけにキレルような形をとっており、普段意識的に問題行動を起こしたい（例：家出をしたい、先生をなぐりたい）とは思わない可能性も考えられる。

第4節 感情表出の制御と自我同一性との関連 [研究8]

目的

Erikson (1980) によると「自我同一性の感覚とは、自分の内的同一性と連続性を維持する個人の能力が、他者からとらえられる自分という意味の、同一性と連続性によって、ふさわしいとされて生じた自信」のことであり、同一性の形成においては他者との関わり方が重要であると指摘している。また、杉村 (1998) は青年期のアイデンティティ形成を関係性の観点からとらえており、その内容は、自己と他者との関係のあり方がアイデンティティであるパラダイムをもつ必要があり、アイデンティティ形成は、自己の視点に気づき、他者の視点を内在化すると同時に、そこで生じる両者の視点の食い違いを相互調整することによって解決するプロセスであると述べている。また、友人と深いつながりからくる一体感や連帯感はアイデンティティ形成の作業に向かう青年を側面から支えると指摘している。

友人との関係において感情表出を多く制御することは、自己と他者の視点の違いから生じる食い違いを調整するというプロセスとは程遠く、友人との深い付き合いには結び付きにくい。こういう関係性の観点から自我同一性をとらえると、感情表出の制御を多く行うことが青年の自我同一性の形成の危機に繋がる可能性がある。

そこで、本研究では、自我同一性の「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」の4つの自我同一性感覚と感情表出の制御との関連について検討することを目的とする。

方法

被調査者 東京都公立高校3校 1年生113名(男子49名, 女子64名), 2年生155名(男子57名, 女子98名), 3年生(男子112名, 女子99名)。学力のレベルは「中の上」である。

調査内容

(a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。

(b) 自我同一性尺度：谷(1997)が自我同一性(第Ⅴ段階)の感覚を測定するために作成した25項目を使用した。7件法を採用しており「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの7段階に対し7点～1点を与えた。得点が高くなるほど同一性の感覚を有することを示す。下位尺度として「自己同一性・連続性」, 「対自的同一性」, 「対他的同一性」, 「心理社会的同一性」の4側面から構成されている。信頼性は検証されている。

調査方法 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

まず、感情表出の制御の各下位尺度得点の上位30%, 中位30%, 下位30%をそれぞれ高群(H)・中群(M)・低群(L)の3群にわけた。残りの10%は分析に使用されていない。なお、各々の因子における感情表出の制御・学校段階・性別被験者数はTable4-20に示されている通りである。

それぞれの因子における高・中・低群の各項目の合計による区分得点は、第1因子(高群19以上, 中群18未満14以上, 低群14未満), 第2因子(高群12以上, 中群11未満8以上, 低群7未満), 第3因子(高群14以上, 中

Table4-20 自我同一性における感情表出の制御・性別被調査者数

	男			女		
	H	M	L	H	M	L
第1因子	74	55	61	89	87	42
第2因子	86	55	30	35	76	87
第3因子	83	69	47	125	68	47
第4因子	79	57	45	65	98	53
第5因子	67	18	68	79	33	57

注) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。

第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、
第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

群14未満10以上, 低群10未満), 第4因子(高群12以上, 中群11未満8以上, 低群8未満), 第5因子(高群5以上, 中群4未満3以上, 低群3未満)である。

次に, 感情表出の制御と自我同一性感覚との関連を検討するために, 感情表出の制御(H・M・L)×性の2要因分散分析を行った(Table4-21)。なお, 本研究の多重比較には, すべてLSD法が用いられた。

自己斉一性・連続性では, 第1因子の「八方美人的制御」において感情表出の制御の主効果($F(2,403)=7.81, p<.001$)および性の主効果($F(1,403)=4.33, p<.05$)が認められ, 第2因子の「非仲間志向的制御」において感情表出の制御の主効果に有意傾向が見られた($F(2,363)=2.39, p<.10$)。第3因子の「自己抑圧的制御」において感情表出の制御と性の交互作用に有意傾向が見られ($F(2,433)=2.42, p<.10$), 第4因子の「同調のための抑制的制御」において性の主効果に有意傾向が見られた($F(1,391)=3.16, p<.10$)。第5因子の「同調のための強調的制御」において感情表出の制御の主効果が認められた($F(2,314)=9.32, p<.001$)。

そこで, 主効果および交互作用が見られたところに対し, 単純主効果の検定および多重比較を行った結果, 「八方美人的制御」の低群と中群が高群より自己斉一性・連続性感覚が高いことが示された。「非仲間志向的制御」の低群が高群より, また「自己抑圧的制御」においては, 女子の中群が男子の中群や高群より自己斉一性・連続性感覚が高いことが示された。「同調のための強調的制御」の低群と中群が高群より自己斉一性・連続性感覚が高いという結果となった。性差が見られたところではすべて女子が男子より自己斉一性・連続性が高い結果となった。

対自的同一性では, 第5因子「同調のための強調的制御」において感情表出の制御の主効果が認められた($F(2,314)=4.04, p<.05$)。そこで, 多重比

較を行った結果、「同調のための強調的制御」の低群と中群が高群より対自的同一性感覚が高いことが示された。

対他的同一性では、すべての因子において性の主効果が認められた。また第2因子の「非仲間志向的制御」において感情表出の制御の主効果が認められた ($F(2,363)=4.10, p<.01$)。多重比較の結果、「非仲間志向的制御」の低群が高群より対他的同一性感覚が高いという結果であった。なお、女子が男子より対他的同一性感覚が高かった。

心理社会的同一性では、第5因子の「同調のための強調的制御」において感情表出の制御の主効果が認められた ($F(2,314)=4.43, p<.05$)。多重比較の結果、「同調のための強調的制御」の低群が高群より心理社会的同一性感覚が高いという結果であった。

結果を因子別に見てみると、第1因子の「八方美人的制御」を多く行う生徒は「自己斉一性・連続性」の感覚が低く、第2因子の「非仲間志向的制御」を多く行う生徒は「自己斉一性・連続性」と「対他的同一性」が低いという結果であった。第3因子の「自己抑圧的制御」においては感情表出の制御と性の交互作用が認められ、「自己抑圧的制御」を中程度行う男子と多く男子が中程度行う女子より「自己斉一性・連続性」の感覚が低いことが示された。第4因子「同調のための抑制的制御」においては感情表出の制御における有意な差が認められなかった。第5因子「同調のための強調的制御」においては「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」および「心理社会的同一性」において有意な感情表出の制御差が見られ、「同調のための強調的制御」を多く行う生徒は他の群の生徒と比べ自己同一性感覚が低いという結果となった。性差が認められたすべての因子において女子が男子より自我同一性感覚が高いという結果であった (Fig.4-16)。

これらの結果から、感情表出の制御と自我同一性は密接に関連しているこ

Table4-21 自我同一性における感情表出の制御の各群の平均(SD)および分散分析の結果

		自己同一性・連続性 (F1)		対自的同一性 (F2)		対他的同一性 (F3)		心理社会的同一性 (F4)
第1因子	男	H 19.85 (7.56)		18.00 (7.02)		16.65 (5.91)		19.73 (5.31)
	M	22.19 (7.46)		19.26 (6.52)		16.30 (6.18)		20.39 (5.82)
	L	23.86 (9.09)		19.71 (8.46)		17.00 (7.49)		20.00 (7.05)
	女	H 21.88 (7.91)		18.72 (6.42)		18.31 (6.38)		19.97 (5.84)
	M	24.11 (7.00)		19.48 (6.84)		19.34 (5.57)		20.52 (5.64)
	L	24.46 (6.69)		18.66 (6.67)		17.25 (5.17)		20.18 (5.10)
	表・制	7.83 ***	H<(L・M)	1.34		.20		.39
	性差	4.35 *	男<女	.03		9.14 **	男<女	.06
	交互	.66		.43		1.05		.03
第2因子	男	H 20.97 (7.78)		18.17 (6.39)		16.54 (6.24)		19.54 (5.91)
	M	22.18 (8.71)		19.71 (7.81)		16.31 (5.87)		20.39 (6.02)
	L	22.20 (8.80)		18.66 (8.55)		18.50 (7.67)		19.30 (7.06)
	女	H 21.91 (7.07)		18.13 (6.65)		15.66 (5.58)		19.05 (6.30)
	M	22.64 (7.11)		17.36 (5.69)		18.46 (5.20)		19.85 (5.23)
	L	24.39 (7.55)		20.26 (7.18)		19.08 (6.50)		20.59 (5.89)
	表・制	2.39 †	H<L	2.14		4.10 **	H<L	.65
	性差	1.51		.54		3.53 *	男<女	.01
	交互	.46		2.06		1.69		.83
第3因子	男	H 22.00 (7.64)		18.27 (6.37)		16.90 (6.20)		19.66 (5.58)
	M	20.94 (7.62)		18.63 (6.79)		16.57 (6.51)		20.64 (5.51)
	L	22.72 (9.62)		20.22 (8.68)		16.74 (6.96)		19.93 (7.13)
	女	H 22.31 (7.43)		18.34 (6.57)		17.78 (6.17)		19.64 (5.62)
	M	24.43 (6.84)		19.57 (6.53)		20.07 (5.10)		20.33 (5.23)
	L	23.50 (8.08)		18.83 (6.58)		18.04 (5.71)		20.68 (5.97)
	表・制	.44		1.07		1.19		1.01
	性差	3.69 †	男<女	.00		10.14 **	男<女	.00
	交互	2.42 †	(男M・男H)<女M	.75		1.69		.07
第4因子	男	H 22.08 (7.28)		17.87 (5.94)		16.46 (5.84)		20.41 (5.40)
	M	21.36 (8.35)		18.93 (7.13)		16.59 (6.08)		20.05 (6.39)
	L	21.60 (9.16)		20.12 (9.17)		16.91 (8.22)		19.29 (6.85)
	女	H 22.53 (7.05)		17.90 (5.71)		17.55 (5.93)		19.05 (5.66)
	M	22.49 (7.44)		19.64 (6.83)		18.68 (5.67)		20.12 (5.29)
	L	25.16 (7.82)		18.65 (6.65)		18.94 (6.25)		21.01 (5.95)
	表・制	1.10		2.47		.91		.30
	性差	3.16 †	男<女	.04		7.92 **	男<女	.00
	交互	.55		.55		.08		1.83
第5因子	男	H 20.18 (7.60)		18.13 (6.64)		16.44 (5.61)		19.33 (5.22)
	M	23.10 (7.21)		19.05 (8.32)		18.57 (5.23)		19.78 (5.36)
	L	23.94 (8.72)		19.88 (8.12)		16.19 (7.88)		20.72 (7.36)
	女	H 21.55 (6.85)		17.15 (6.31)		17.53 (5.82)		19.09 (5.38)
	M	23.74 (7.90)		20.51 (6.28)		19.75 (5.89)		21.47 (5.24)
	L	25.16 (7.29)		20.08 (7.34)		18.55 (6.35)		21.38 (6.17)
	表・制	9.32 ***	H<(L・M)	4.04 *	H<(L・M)	2.21		4.43 * H<L
	性差	2.15		.02		6.16 *	男<女	.54
	交互	2.30		.44		.16		.35

注1) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

2) †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

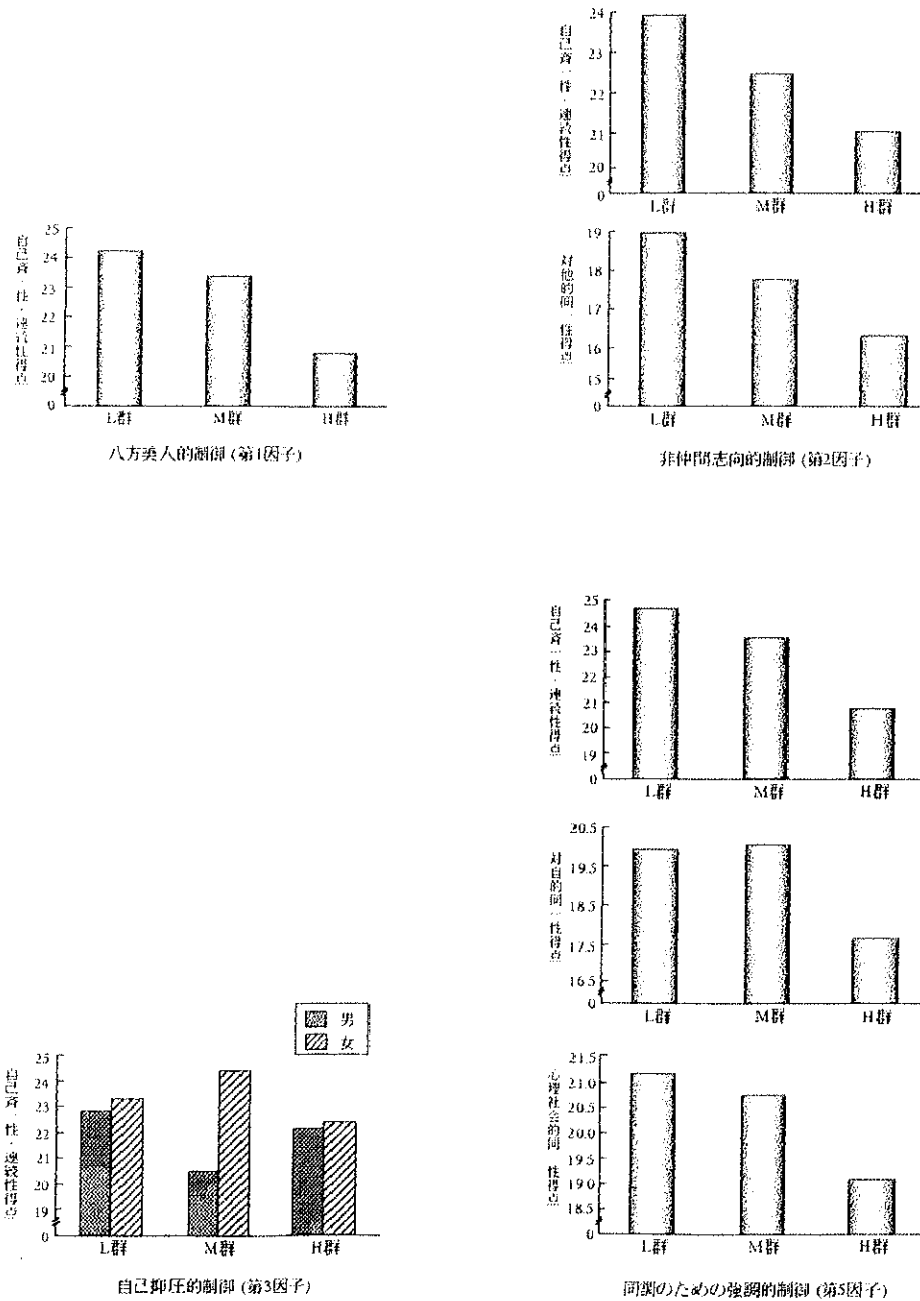


Figure 4-16 自我同一性における感情表出の制御の各群の平均値

とが明らかにされた。自我同一性の中でも特に、自己斉一性が感情表出の制御と多く関連しているようである。また、第2因子の「非仲間志向的制御」および第5因子の「同調のための強調的制御」は自我同一性において重要な感情表出の制御であることが示された。友人に対するポジティブ感情は抑制し、ネガティブ感情を強調することは、本人にとっては、何かの理由があるかも知れないし、またはそういう表出しかできないのかも知れないが、こういう感情表出の制御を長く続けることは友人関係において望ましくないことが考えられる。また、本人にとっても「自分をなくしてしまった」とか「人前での自分は、本当の自分ではない」と感じる人が多いであろう。

また、友人の強いネガティブ感情に合わせるために、同調して強く怒ったりイライラしているふりをする「同調のための強調的制御」を多く行うことは、かなりのエネルギーと演技が必要な制御である。また、たとえ演技であるとしてもネガティブ感情を強く表すことによって、ネガティブな気分にもなってくると思われる。そこで、「自分をなくしてしまった」、「自分が何を望んでいるのかわからなくなる」または、「現実の社会の中で、自分らしい生き方ができるだろうか」などの思いをすることになり、そこで自我同一性感覚を低めるような機能をするのではないだろうかと思われる。金子（1995）は友人との関係と自我同一性との関連を検討した結果、友人に左右されやすかったり、距離をおく傾向が強かったりする人ほど、「私はだれ？」というような自我同一性拡散の感覚が強いことを明らかにし、本研究での結果と一致する結果を報告している。感情表出の制御を多く行うことは、同一性形成途上にある青年の不安の強い自他関係を表現しており、そのような関係が自我同一性の形成において望ましくないことが示唆された。

研究8の要約

研究8では、感情表出の制御と自我同一性意識との関連を検討した。その結果、自我同一性の中でも、「自己斉一性・連続性」が感情表出の制御と密接に関連しており、感情表出の制御を多く行う生徒は「自分をなくしてしまった」といったような「自己斉一性・連続性」感覚が低いことが示された。なお、「非仲間志向的制御」と「同調のための強制的制御」は自我同一性において重要な感情表出の制御であることが示されるなど、自我同一性意識において感情表出の制御が重要な要因であることが推測される。

第5節 第4章のまとめ

第4章の目的は感情表出の制御と内的・社会的との関連を検討することであった。その結果をまとめると次のようである。

感情表出の制御の中でも、「八方美人的制御」を多く行う生徒は自尊感情が低く、キレ衝動およびストレスが高いという結果であった。ただし、男子生徒においてはこのような制御を中程度または多く行う方が少なく行う人より、充実感が高いという結果であった。すなわち、男子においてはある程度大きさに相手に対するポジティブ感情を表わしたり、相手に合わせてポジティブ感情を強めて表す方が生活が面白いと感じていることが示された。友人関係の満足感および問題行動念慮においては有意な差が示されなかった。

次に、「非仲間志向的制御」においては、この制御を少なく行う方が自尊感情が高く、ストレスは低く、この制御を多く行う人はキレ衝動が高かった。また、友人関係の満足感においては制御を少なく行う人が満足感が高いという結果であった。学校生活意識類型においては、勉強型（学校適応かつ孤立志向）および孤立型（脱学校かつ孤立志向）が適応型（学校適応かつ仲間志向）および逸脱型（脱学校かつ仲間志向）より「非仲間志向的制御」を多く行うことが明らかにされた。なお、問題行動念慮においては、「非仲間志向的制御」を多く行う女子生徒は「学校をやめたい」と思うことが多い。また、この制御を多く行う男女生徒は「死にたい」と思うことが多いことが明らかにされた。また、この制御を中程度行う生徒がこの制御を多く行ったり、少なく行う生徒より「先生をなくりたい」または「覚醒剤やシンナをやってみよう」と思うことが少ないことが明らかにされた。

「自己抑圧的制御」においては、この制御を少なく行う方が自尊感情が高く、ストレスが低かった。なお、少なく行う女子生徒が他の女子生徒や男子

生徒より充実感が高いという結果であった。しかし、高校生の場合「自己抑圧的制御」を少なく行う方が多く行う方より、キレ衝動が高いという結果であった。すなわち、相手に対するネガティブ感情を率直に表わせないことはそれが自尊感情を低め、ストレスを高めるのではないかと思われる。また、この制御は第3章の「発達的变化」で示されたように、中学生より高校生が、また男子より女子が多く行う制御であり、題名からも示されているように自分を抑制して表す制御である。こういう制御を通常多く行うことは生徒に生活がつまらないものと認識させることになると思われる。特に女子が多く行われると一般に認識されているこの制御は実際女子の方が多く行っており、この制御を行わない女子生徒がのびのびと生活ができ、また生活にはりがあるって楽しいと感じているということが示された。また、普通の高校生ならある程度行っているこの制御を少なく行う高校生はもともと攻撃性が高いかまたは攻撃性が高まっている状態であることが考えられ、それによってキレ衝動も高く現われていることと推察される。

また、この制御を少なく行う方が友人関係の満足感が高いことが示された。問題行動念慮においては「自己抑圧的制御」を少なく行う生徒が「学校をやめたい」および「先生をなぐりたい」と思うことが多いことが示された。以上の結果から考えると、「自己抑圧的制御」を少なく行う方が、自分を率直に出せる自分に対する自己評価が高く、友人関係における満足感も高く、ストレスを溜めないと思われる。しかし、少なく行うから精神的に健康であり問題行動が現われないということではなかった。この制御を少なく行う人の中には *under control* が多く、攻撃的である可能性が高く、そのようなパーソナリティからキレ衝動が高く、問題行動が見られると思われる。

「同調のための抑制的制御」においては、多く行う人より少なく行う方が自尊感情が高いことが示された。ただし、充実感においては性差と感情表出

の制御差との交互作用が認められ、女子においてはこの制御を多く行う方より少なく行う方が、男子においては多く行う方が充実感が高いことが示され、性差が見られた。すなわち、女子は自分の正直な感情を表して本当の自分を理解してもらうことによって生活の楽しさを経験するのに対し、男子は自分の本当の感情を抑制してでも友人に合わせ、同じ感情を共有することによって生活の楽しさや張りあいを経験することが示された。

友人関係の満足感においてはこの感情表出の制御を少なく行う人がそうでない人と比べ、満足感が高いことが示された。

「同調のための強制的制御」においては、多く行う人よりそうでない人の方が自尊感情が高く、ストレスが低いという結果であった。男子においては多く行う方が少なく行う人より充実感が高く、高校生において、中程度行う人より多く行う人の方がキレ衝動が高いことが示された。問題行動においては高校生の場合、この制御を多く行う女子と少なく行う男子が「家出をしたい」と考えており、少なく行う男子が「親をなぐりたい」と思うことが明らかにされた。この結果から考えると、男子の場合、友人に同調して怒りやイライラなどのネガティブ感情を強めて表すことが周りから求められていることが考えられ、こういう制御を行わない人は男子社会では生活が楽しくなっていくことと思われる。また、感じていない強いネガティブ感情を強めて表す制御が男子社会では求められているのにも関わらず、そういうスキルを少なく行う人のパーソナリティとして内向的であることが考えられ、学校での問題行動である「中退」や「先生への暴力」の方より、家での問題行動である「家出」や「親への暴力」の方に現われるのではないと思われる。

以上のように、各感情表出の制御の種類別に内的・社会的適応感との関連を検討した結果、自尊感情、ストレスのような精神的健康の面を測定したところにおいては、感情表出の制御を多く行う人は自尊感情が低く、ストレス

が高いという結果であった。次に、比較的パーソナリティの影響が強いと思われる。

キレ衝動または、適応に重要ではあるが自尊感情やストレスほど精神的健康に直結しないと思われる充実感においては、感情表出の制御の種類、性、学校段階によって少々異なる結果が得られた。まず、感情表出の制御を多く行う人がキレ衝動が高いという結果から考えられることは、予測したように感情表出の制御を多く行うことがストレスにつながり、どう解消していいかわからない状態で「キラしたい」または「キレそうだ」というキレ衝動が高まるからであると思われる。ただし、「自己抑圧的制御」において高校生の場合、感情表出の制御を少なく行う人がキレ衝動が高いという結果も得られた。高校生において最も多く行われる「自己抑圧的制御」を少なく行うということは、もともと攻撃性が高いため自分を抑えないことが考えられ、その攻撃的なパーソナリティが強いキレ衝動につながったことと思われる。充実感においては、男女において違いが見られ、男子の場合は友人の感情に同調するために自分の感情を強めたり弱めることを多く行った方が充実感が高いのに対し、女子の場合は感情表出の制御を少なく行い、ありのままの自分を出す方がことが充実感が高いという結果であった。

友人関係の満足感においては自分の感情を強めて表す「八方美人的制御」と「同調のための強調的制御」の場合は有意な差が見られなかったものの、友人に対するポジティブ感情は抑制し、ネガティブ感情は強調して表す「非仲間志向的制御」、友人に対するネガティブ感情を抑制して表す「自己抑圧的制御」、やりとりの友人以外の人やものに対する自分の気持ちを友人の感情に合わせるために抑えて表す「同調のための抑制的制御」の3つの感情表出の制御において、感情表出の制御を多く行う人が友人関係の満足感が低いという結果であった。すなわち、自分の感情を強めて大きめに表すことも、

友人関係の満足感（例：「周囲の友達に十分に受け入れられていないと感じる」、「本当に理解してくれる人がいないように感じる」）につながらないが、自分の感情表出を抑圧しすぎる人も友人関係に満足感が持てないということが示唆された。

問題行動念慮においては、「非仲間志向的制御」と「死にたいと思うこと」との関連を除いて、全体的に感情表出の制御を少なく行う人が問題行動を起こしたいと思うことが多いという結果であった。反対に、感情表出の制御を多く行うことは精神的健康にマイナスの影響を及ぼすが、それが直接的に「自殺」や「家・学校での暴力」のようは問題行動を起こしたいと思うことが少ないという結果であった。この結果は一見、自尊感情やストレスのような精神的健康との関連での結果と矛盾するように思われるが、次のような解釈が可能であろう。

すなわち、感情表出の制御を少なく行う人に最も多い性格として攻撃性が高いことが考えられ、高い攻撃性がちょっとした理由で問題行動を起こしたいと思うことにつながるであろう。これらの問題行動は、「研究7の目的」のところで述べた問題行動の3つのパターンの中で、普段トラベルを起こしているような子、いわば「不良」と呼ばれる子の中で多く見られるであろう。それに比べて感情表出の制御を多く行う人の性格として遠慮深く他人の評価に敏感であるなど内向的な性格の人が多いと思われる。こういう人は感情を制御しすぎることによってストレスは溜まり、自己評価が低い、問題行動を起こしたいと思うまで直結しないと思われる。しかし、ここで測定した問題行動念慮はあくまでも、「～（様々な問題行動）についてどれぐらい思うのか」という質問に関する結果であり、問題行動そのものではない。すなわち、冷静な状態で問題行動を起こしたいとは思わないとしても、いつも自分を必要以上に抑えている子が自分の我慢の限界を超えた時、自分も知らない

うちに問題行動を起こすケースが多く、最近の青少年の問題行動の特徴を表現している言葉のなかには「ちょっとしたことでキレた」、「原因がわからない」とか「おとなしい子が急に…」などといったような記述が多い。すなわち、問題行動パターンの中で、普段おとなしい子がキレるような問題行動が多く、こういう場合に考えられるのは、感情表出の制御を多く行う人、つまり普段最も自分を出すべき相手である友人にさえ、自分を抑え続けてきている人は低い自己評価やストレスに苦しめられ、自分の内的適応感も低くなっている状態で、友人関係においても満足感も得られなくなり、「どこかにこの気持ちをぶつきたい」または「キラしたい」という衝動が高い状態に達していると考えられる。こういう状態で、何かちょっとしたことでキレてしまい、問題行動が行われると思われる。すなわち、普段冷静な状態で問題行動を起こしたいと思うかどうかということと、普段そういうことを意識していなくても自分の我慢の境界を超えた時に問題行動を起こしてしまうことと区別して考える必要がある。

以上で、感情表出の制御と内的・社会的適応感との関連について、様々な観点から検討してみた。これまですぐ攻撃的になる生徒についてはその原因や介入の方法を探るなどの努力がなされてきたが、自分を出さない子は手がかからない子やおとなしい子として見られていた。無論、自分を出さない子の中には本当にそういう自分に満足している子もいるであろう。しかし、自分を出さない子の中には、対人スキルが未熟で、自尊感情が低く、ストレスフルな状態の子が多いことが分かった。本当の自分を出すとみんなからどう思われるかが不安で、自分を出せず仮面をかぶり、よい子を演じ続けている子、自分に自信をもてなく、自分の価値を見い出すことができない子どもたち、こういう子に対する援助が心がけられなければならない。また、自分を出すことに不安を感じている子どもたちが、「ありのままの自分を出しても

いいんだ」という安心感を得たり、「いろんな性格と考え方がいて当然だ」という多様性が認められたりする学校や社会の雰囲気づくりが求められる。